

「蛇性の姪」研究

物語の底流と秋成の創意

博士前期課程二年 〇六七二〇一 藤原 円香

四〇字×三〇行

目次

頁

序

1

第一章 道成寺伝承と「蛇性の姪」

4

第一節 変身における二つの型と変身の意味

4

第二章 原典「白娘子永鎮雷峯塔」と「蛇性の姪」

16

第一節 豊雄の人物像の考察

16

第二節 眞女子の人物像の考察

19

第三節 豊雄における「家の問題」

29

第四節 豊雄を救う三人の人物

33

第三章 「蛇性の姪」における場の問題

40

第一節 物語の発端 紀の國三輪が崎

40

第二節 歌垣の地 石榴市

45

第三節 隠国の泊瀬

49

第四節 三輪山伝承との関係

53

第五節 物語の転換地 吉野と芝の里

57

結び

69

参考文献目録

74

序

上田秋成の『雨月物語』は、明和五年（一七六八）に脱稿され、安永五年（一七七六）四月より、京都・梅村判兵衛と大坂・野村長兵衛を版（板）元として刊行された。秋成は当時四十三歳であった。そこには九編の短編が収められ、中国白話小説や日本の物語あるいは説話などを典拠にそれぞれの物語を構想している。この作品は一般に、「わが国怪異小説史上最高の傑作として、また初期読本の知的な高水準を代表する名作として著名^{注1}」と評価されている。

『雨月物語』は五巻九編の短編で構成される。本稿では巻之四「蛇性の姪」を取り上げて論じていきたい。「蛇性の姪」は、原典の中国白話小説『警世通言』「白娘子永鎮雷峯塔」だけを典拠として創作されたのではなく、道成寺伝承なども作品に取り入れている。すなわち白話小説を原典としつつも秋成独自の作品に創造されているのである。また物語の舞台も思いつきではなく明確な意図を持って選ばれていた。なぜこの場所を選んだのかという秋成の意図に疑問が浮かんだことが研究の動機である。本稿は、三章構成とし、「蛇性の姪」の構想をあとづけするとともにその構造を明らかにしていきたい。

第一章は道成寺伝承について論じたい。道成寺伝承はそれぞれ変身過程において二つの型に分類できる。すなわち「籠り型」と「川渡り型」である。第一節ではこれら二種類の型が意味するものは何かを問題点としたい。その方法は、屋代弘賢「道成寺考」にしたがって道成寺伝承の文献を取り上げそれらを考察していきたい。また蛇に変身する意味を考えていきたい。そして第一節の最後の問題点に、道成寺伝承と「蛇性の姪」の関係を述べてみたい。

第二章は原典「白娘子永鎮雷峯塔」から「蛇性の姪」への換骨奪胎の方法と在り方を考察する。第一節は豊雄の人物像を考える。主人公の豊雄は「生長優しく、常に都風たる事をのみ好（み）て、過活心なかりけり」という青年である。「過活心」を持ち得ない者から次第に「実心」や「丈夫心」を持つようとする者へと変化する点に着目する。また原典「白娘子永鎮雷峯塔」の主人公・許宣の人物像をとりあげ、秋成が豊雄の人物像を設定した意図を考察していく。方法はテキストからの考察を行うだけでなく、豊雄を秋成自身と重ねて創造した点から豊雄の人物像を解決したい。第二節は眞女子の人物像を考察する。眞女子は「顔容髪のかゝりいと艶ひやか」な女性と設定されている。そこから眞女子には外面的な描写が多く描かれている点に注目し考察を行っていく。また眞女子は蛇身であるこ

とから、蛇と女の関係について論じる。道成寺伝承の構造、イザナミ命伝承の構造に着目していき、「蛇性の姪」の構造との関わりを探し出して問題点を解明したい。さらに蛇と水の関係も問題点とし、ヒナガヒメ伝承の構造を用いて考察する。またこの節の最後には秋成が眞女子を設定した意図を考えていく。第三節は豊雄と彼の家族のそれぞれの関係を中心に、豊雄の家族関係とその中での豊雄の位置づけを考える。そして、第四節では豊雄を眞女子から助けようとする三人の僧と物語の結末についての考察を行う。作中、吉野の地で眞女子の正体を見破る當麻の酒人、眞女子を退治しようと呼ばれてくるが逆に眞女子に返り討ちに遭う鞍馬寺の僧、眞女子を三尺程の白蛇に戻し、鉄鉢に入れ土の中へ埋めて彼女を退治する法海和尚が登場する。秋成がそれぞれの僧を設定した意図を探る。また、なぜ眞女子を殺さずに土の中に埋めたのかという物語の結末についても考察していきたい。

第三章は物語の場所を問題点とする。それぞれ物語に選びとられた場所をあげていき、秋成がその地をどのような意図を持って作品に構成していったのかという点を解明していきたい。場所は、紀の國三輪が崎及び熊野・石櫛市・泊瀬・三輪山・吉野・芝の里である。

第一節は紀の國三輪が崎及び熊野を考察する。まず『万葉集』に詠まれている三輪が崎の和歌から、三輪の崎＝神の崎という解釈に焦点を当て考察していく。次に『古事記』と『日本書紀』において三輪が崎が登場する場面から論を展開させる。そしてそれらの場面と「蛇性の姪」との関係を考えていきたい。さらに秋成が物語の出発地に紀の國三輪が崎を設定した意図を考える。そして紀の國及び熊野一帯についても考察する。熊野の由来を諸説とありあげていき、かつ『古事記』と『日本書紀』からイザナミ命が葬られた場所に注目して考察する。第二節に石櫛市をとりあげる。石櫛市は「歌垣の地」として名高い。男女の出会いの地ともいえる。作中では豊雄と眞女子が再会する場とされる。出会いの場と再会の場に注目し考察する。第三節は泊瀬を問題点とする。泊瀬について詠まれている『万葉集』の和歌をとりあげる。そこから「こもりくの泊瀬」の「隠国」という表現に着目し考察していく。第四節は三輪山について論じたい。方法は、『古事記』や『日本書紀』それぞれに記述されている「三輪山伝説」をとりあげて、三輪山に祀られる大物主神＝蛇神に焦点を当てて解明していく。また『万葉集』の中に詠まれる三輪山の和歌に注目する。三輪山＝三室山という考えから、「ムロ」の定義に着目し考えていきたい。第五節に吉野と芝の里を問題点とする。吉野は『万葉集』の中で詠まれている和歌をとりあげて論じる。その中でも「秋津野」という表現に焦点を当て問題点を解明していきたい。続いて、芝の里についてだが、この地が選ばれた意図は未だ明確にされていない。しかしながら考察を試みてみ

たい。芝の里についてはさまざまな説をとりあげ考えていく。以上の点を問題点として考察していく。

なお「蛇性の姪」の本文引用は、中村幸彦校注『日本古典文学大系 56 上田秋成集』（岩波書店）による。

注一 日本古典文学大辞典編集委員会 編

『日本古典文学大辞典 第一巻』 岩波書店 一九八三年一〇月二〇日 二六九頁

第一章 道成寺伝承と「蛇性の姪」

第一節 変身における二つの型と変身の意味

上田秋成の『雨月物語』巻之四「蛇性の姪」は、原典に中国の白話小説「白娘子永鎮雷峯塔」を用いており、また構想の一つに安珍清姫で知られる道成寺伝承を利用している。本節は構想上の原典の確認としてまず道成寺伝承の文献整理から始めたい。

道成寺伝承とは、二人連れの僧が熊野参詣の途中女の宿に泊まったところ、宿の女が若い僧に一目惚れする。その夜、女は若い僧に求愛するのだが若い僧は断る。女は僧のそばから離れようとしないので、熊野参詣から帰る途中に寄り、女の願いに従うと約束する。だが若い僧は女の宿へは立ち寄らず通り過ぎる。それを知った女は怒り、大蛇に変身して若い僧を追跡する。若い僧は道成寺に逃げ込み、寺の人々と相談して鐘の中に隠れる。後から追いかけてきた大蛇は、若い僧が隠れている鐘に巻きつき尾で叩き続ける。しばらくすると炎があがり、大蛇がもとの道へ去って行く。道成寺の僧たちが水をかけ火を消すと、若い僧は灰と塵のみになり、大蛇によって焼き殺されてしまう。数日後、寺の僧の書供養により女は忉利天に僧は兜率天に生まれ変わるといふ伝承である。

こうした伝承を今に伝えるものとして、『大日本国法華経験記』、『今昔物語集』、『元亨釋書』、『道成寺縁起』、謡曲「道成寺」、道成寺清姫和讃」がある。なお、章末に表①として道成寺伝承の文献一覧を附した。それぞれの文献を比較していくと、特徴となる点はその変身過程である。そしてそれは「籠り型」と「川渡り型」の二種類の型があげられる。そこで以下に「籠り型」と「川渡り型」について考察したい。さらにどちらの型も変身するものは蛇となっている。したがって蛇に変身する意味を考察していき、道成寺伝承とはなにかという全体像を把握していきたい。なお章末に道成寺伝承の文献一覧と同様に表②として比較項目の一覧も附した。

一、「籠り型」

「籠り型」とは、変身過程において、女は若い僧を待ち続けていたが、僧はすでに女の家を通り過ぎて帰ってしまふ。それを知って怒った女は、家に帰って隔舎や寝屋に閉じ籠り、しばらくすると大蛇に変身するという型である。『大日本国法華経験記』の「紀伊国牟婁郡の悪しき女」、『今昔物語集』の「紀伊国道成寺僧寫」法華「救」蛇語」、『元亨釋書』巻

第十九の三作品がこの型にあてはまる。それぞれの伝承の構造は似ている。まず「籠り型」の構造をまとめてみると以下のようになる。

- (1) 熊野参詣の途中にある牟婁郡という場所で、老僧と若い僧が女の宿に投宿する。
- (2) 女は若い僧に求愛する。
- (3) 若い僧は女に、還向の時にあなたの願いに従いましょうと約束する。
- (4) 若い僧は女の宿に寄らずに帰る。 ↓約束破棄
- (5) 女は大いに怒り寝屋に籠り大蛇に変身する。 ↓変身
- (6) 女(大蛇)は若い僧を追跡し、僧は道成寺に逃げる。
- (7) 大蛇は若い僧が隠れている鐘に巻きつき尾で龍頭を叩き続け、火焰があがる。
- (8) 若い僧は焼き殺され灰と塵のみになる。
- (9) 道成寺の僧の書供養で、女は切利天に若い僧は兜率天に生まれ変わる。 ↓成仏

女は寝屋などの或る空間に籠って変身する。『今昔物語集』では、女は寝屋に閉じ籠り物音一つもせず「即ち死ヌ」と語られており、死んでしまった後に蛇に変身する。『大日本国法華経験記』と『元亨釋書』は、一度死んで蛇に変身することは描かれていない。つまり女は生きたまま蛇に変身したのだろう。蛇に変身する過程において、「籠り型」の中にも、『今昔物語集』のように一度死んで再生して蛇に変身する「生」と「死」の構造を持つ型や、『大日本国法華経験記』、『元亨釋書』のように、再生しないで生身の人間から蛇に変身する構造を持つ型と、二つの型に分類できる。ただし、どちらも蛇に変身するため、籠る空間が存在し変身する時間が必要とされる。すなわち籠る空間は特別な空間なのではないかと考えられる。

籠る空間について、「こもる」空間とはかつて巫女に相当する人物が神の宣託を受ける聖空間^{注一}と考えられた。また後世には「修行者が靈験を獲得する場^{注二}」でもあった。神の宣託を受けることや靈験を獲得する場合などと、籠る空間は神聖な場を示している。その籠る空間が古くは洞穴とされ、それから家の寝屋などの空間へと移ってきたと考えられる。

さらに、道成寺伝承の「籠り型」の舞台である「牟婁郡」の「ムロ」も「籠り型」に係するとされる。籠る空間の最も古い場所は、「ムロ」と「洞穴」や「窟」と考えられ、「ムロ」の語義は「忌み籠る場」という意味も持っている。^{注三}『角川日本地名大辞典』には、「田辺近郷」の地を除いて当郡を「熊野」と呼ぶこともあったことからも、牟婁郡も熊野に含まれ、この地もまた聖なる空間と考えられたかもしれない。^{注四}

よって籠る空間は、聖なる空間という意味を持ち、それは洞穴から家の寝屋へと移り変

わっていった。そしてそこは忌み籠る場所でもあり、さらには死や蘇生を示した場所でもある。「籠り型」は、『今昔物語集』のように一度死んで蛇に変身する、再生する意味を含めていることや、『大日本国法華経験記』、『元亨釋書』では、死んではいけないながら、変身することは再生や復活するという意味を含めて考えることで、籠り変身する構造なのではないだろうか。籠り型の中にも『今昔物語集』の型と『大日本国法華経験記』、『元亨釋書』の型とに分類できるのだが、結局は籠ることによりどちらにも再生や復活する意味が含まれているので、同じ構造の型だと認識することができるのである。

二、「川渡り型」

「川渡り型」とは変身過程において、若い僧の裏切りによって怒った女は、僧を追跡し日高川に辿り着く。僧は舟で日高川を渡るが、女は渡ることができない。それは、渡し人が舟に乗せてくれない場合や日高川の水かさが増して渡ることができない場合においてである。そのことにより怒った女が日高川に入り大蛇に変身する型である。「道成寺縁起」、「道成寺清姫和讃」がこの型にあたる。また謡曲「道成寺」もこの型にあたるものと考えられる。「川渡り型」は「籠り型」に比べそれぞれの文献が類似するわけではないが、伝承構造に明確な違いはみられない。「川渡り型」の構造をまとめると以下ようになる。

(1) 熊野参詣の途中の眞砂（まなご）という場所で、若い僧（安珍）が庄司の家に投宿する。女はこの家の娘である。

(2) 女は若い僧（安珍）に求愛する。

(3) 若い僧は還向の時にあなたの願いに従いましょうと約束する。（「道成寺縁起」）
若い僧は逃げ出す。（「道成寺清姫和讃」・謡曲「道成寺」）

(4) 女の宿に寄らずに帰る。（「道成寺縁起」）
↓約束破棄

(5) 女は服を脱ぎ捨て川に入り大蛇に変身する。
↓変身

(6) 女（大蛇）は若い僧を追跡し、若い僧は道成寺に逃げ込む。

(7) 大蛇は若い僧が隠れている鐘に巻きつき尾で龍頭を叩き続け、火焰があがる。

(8) 若い僧は焼き殺され骸骨になり黒焦げにされる。（「道成寺縁起」）
安珍は蛇道へ落ちる。
↓つまり焼き殺される。（「道成寺清姫和讃」）

山伏（先達）は焼かれて消え失せる。（謡曲「道成寺」）

(9) 道成寺の僧の書供養で、女は忉利天に僧は兜率天に生まれ変わる。（「道成寺縁起」）
尊き御僧の読経により女と僧は共に成仏する。（「道成寺清姫和讃」）

後日譚はない。(謡曲「道成寺」)

二種類の型をみてきたが変身過程が大きく異なる点と指摘できる。それ以外は大きな違いはみられないだろう。どちらも女から若い僧に求愛する点、若い僧が逃げて女が追跡する点などからいえるのである。

「川渡り型」は、日高川すなわち「水」と関係して変身するのではないだろうか。例えば「道成寺縁起」では、若い僧を追跡する女は一度若い僧に追いつく。しかし若い僧に騙されて再び逃げられてしまう。それに怒った女は上半身が毒蛇となつて若い僧を追跡する。そして日高川に入った時に川の水の呪力に触れて全身大蛇に変身するのである。水に触れ、水の呪力によつて「川渡り型」は大蛇に変身する型といえる。蛇は、「古くから水神として農民に恐れ敬われていた守護霊」^{注五}であることから大蛇は水神と考えられてきた。つまり女が川の水に触れて大蛇に変身したのは、水の呪力に触れたことが原因であり、大蛇＝水神となり、川の水かさが増えてしまつても簡単に日高川を渡ることができたといえる。

水は昔から霊的な力を持っていると信じられてきた。それは日本に限ったことではない。水は霊力を持ち、流れているものであるゆえに「遠く霊界に結びつく」^{注六}と考えられている。水の流れが霊界や現世ではない世界＝異界に繋がるとすれば、水が霊力や呪力を持つといえる。水の霊力や呪力とは、復活、蘇生、転生をもたらす力があるのではないだろうか。水は神秘力のあるものの一つとされ、はじめは限られた地域のものだけを指していたが、次第に日常の飲料水までを指すようになった。そして、「古い信仰の水は、常世波として、岸に打ちよせて、川を遡り、山野の井泉の底にも通じて、春の初めの「若水」となる。この初春の若水から、命の水として、復活・蘇生・転生をもたらす」^{注七}とされていたのである。要するに水の呪力とは復活や蘇生を表しているといえよう。また物理的にも信仰としても対象を浄化すると信じられているのである。

したがって「川渡り型」伝承は、女が川を渡ると大蛇に変身する型なのであるが、それは日高川の、つまり水の呪力によつて変身する型である。水の呪力とは、復活、蘇生という意味を示すと考えられる。「川渡り型」は、女が川を渡ろうとして復活や再生を意味する水の呪力に触れ、再生して大蛇に変身したのだと連想でき、そのことから水神となり川を渡ったのだと考えられる。変身過程において「籠り型」と「川渡り型」とは変身方法が異なっている、蛇に再生することを表すという意味は同じであると考えられる。

三、まとめ

このように道成寺伝承を考察してきた。道成寺伝承の全体像は以下のように考えると考えられる。

- (1) 熊野参詣の途中、若い僧が女の宿に投宿する。
- (2) 女は若い僧に求愛する。
- (3) 若い僧は女に参詣が終わったら願いを受け入れると約束する。
- (4) しかし若い僧は女の宿に寄らずに通り過ぎ、約束を破棄する。
- (5) 女は大いに怒る。
- ① 寝屋に籠り大蛇に変身する。 ↓ 籠り型
- ② 川に入り大蛇に変身する。 ↓ 川渡り型
- (6) 女(大蛇)は若い僧を追跡し、僧は道成寺に逃げる。
- (7) 大蛇は若い僧が隠れている鐘に巻きつく。尾で龍頭を叩き続けるうちに、火焰があがる。

(8) 若い僧は焼き殺される。

(9) 書供養により若い僧と女は成仏する。

道成寺伝承は主に老僧・若い僧という二人の僧と寡婦または娘という独身の女が登場する。登場人物には名前がない。若い僧の名が「安珍」と記述している文献が存在するが、原則として男女ともに名前はない。変身過程において、「籠り型」・「川渡り型」と異なるが、どちらも蛇に変身している。それは再生や復活の意味を持つのだと考えられる。「籠り型」は寝屋など聖なる空間に籠って蛇に変身する型であり、「川渡り型」は水の呪力に触れて蛇に変身する型である。変身することは再生することを示す。水の呪力とは復活や再生の意味が含まれている。変身過程は異なるが、どちらの型も復活や再生という同じ意味を持っていることがいえるのである。そして次の問題点として、変身過程が「籠り型」から「川渡り型」へと変遷した意味について考えてみたい。

四、「籠り型」から「川渡り型」への変遷についての考察

では次に「籠り型」から「川渡り型」への変遷の意味を考察したい。「籠り型」は『大日本国法華経験記』『紀伊国牟婁郡の悪しき女』、『今昔物語集』『紀伊国道成寺僧寫「法華」救蛇語』、『元亨釋書』である。一方の「川渡り型」は、「道成寺縁起」、謡曲「道成寺」、「道成寺清姫和讃」である。「籠り型」は古い文献にみられ「川渡り型」は新しい文献にみ

られる。

まず成立年代から考えてみたい。道成寺伝承の文献の中で一番古いものとされる『大日本国法華経験記』は、一〇四〇～一〇四四年に成立したとされている。平安時代に成立している。その後『今昔物語集』、『元亨釋書』と続く。『元亨釋書』の成立は元亨二（一三二二）年で鎌倉時代に成立している。したがって「籠り型」の文献は鎌倉時代以前のものと推測できる。一方「川渡り型」の代表的な文献である「道成寺縁起」は応永三十四（一四二七）年の室町時代の成立となっている。すなわち、「籠り型」と「川渡り型」の成立は鎌倉時代以前と室町時代以後に分類されると考えられる。鎌倉時代までが「籠り型」であり室町時代に入り「川渡り型」へと変化していった。

また阿部真司氏は『蛇神伝承論序説』の中で、「籠る」型の方が、追跡の途中に蛇に変身していくものより古態のようである。籠りは最も古い祭儀性でもある」と述べている。^{注八}この指摘から籠って蛇に変身するという設定は予測できるうえに、それが古い文献にみられることも考えられるだろう。籠る場所は祭儀性を持つ空間であり聖空間とみなされる。それに対して「川渡り型」の川を渡ることは、祭儀性を持つと考え難いといえるだろう。祭儀性を持つか持たないかという点から、川渡り型は室町時代以後の文献に表れてくる。しかし、川渡り型の文献の中でも、「道成寺縁起」は籠り型の伝承構成と重なる部分がある。それは、女からの求愛に若い僧が約束する約束の設定と約束を破棄する設定があげられる。他の川渡り型の文献は、約束を交わさずすぐに若い僧が逃げ出す設定であるのに対して、「道成寺縁起」は約束と約束破棄の設定を取り入れている。「道成寺縁起」は、『大日本国法華経験記』や『元亨釋書』などの「籠り型」文献の影響を少なからず受け、変身過程において「川渡り型」に分類されるのだといえる。「道成寺縁起」は「籠り型」伝承と「川渡り型」伝承の間にあり、「籠り型」文献の影響を受け、その後の「川渡り型」文献の影響を与えたのではないだろうか。

さらに籠り型伝承は、イザナミ命伝承の構造を、川渡り型伝承はヒナガヒメ伝承を継承しているといわれている。^{注九}蛇身である点、男との関わりを持つ点、男が逃げて女が追跡する点、かつ最後に別れる設定がある点からいえる。『日本書紀』ではイザナミ命の墓所は紀伊国熊野の有馬村にあると記述されている。牟婁郡を熊野と呼ぶことがあり、有馬村の一带が牟婁郡といわれていたことから、イザナミ命伝承は、「籠り型」の舞台となる牟婁郡との関わりがあると連想できるだろう。さらに有馬村の中に「花の窟」があり、そこがイザナミ命の墓所とされている。「窟」は、「ムロ」や「洞穴」と同様に籠る空間の最も古い

場所とみなされている。これらのことから、「籠り型」伝承がイザナミ命伝承の構造を継承していると考えられる。一方、川渡り伝承はヒナガヒメ伝承を継承している。ホムチワケがヒナガヒメの蛇身の姿を見て驚き逃げる。ヒナガヒメがホムチワケを追跡する。追う女と逃げる男の設定を示している。ヒナガヒメは悲しみ、海原を照らして舟でホムチワケを追跡する。海は水と連想できる。海Ⅱ水Ⅱ川というように「川渡り型」と関係するのだといえる。

よって、道成寺伝承の中で必要不可欠な逃げる男と追う女という構造の基となった最も古い伝承はイザナミ命伝承だということが指摘できる。その伝承が籠り型伝承と繋がっていく。籠り型伝承は道成寺伝承の文献の中で古い伝承と分類する。それに対して、ヒナガヒメ伝承はイザナミ命伝承より後に伝えられる伝承という点と同様に、道成寺伝承の「川渡り型」伝承も「籠り型」伝承より後に伝えられている。神話の伝承構造の流れと道成寺伝承構造の流れは類似している。ゆえに「籠り型」から「川渡り型」へと変遷していったと考察する。

五、蛇に変身する意味

道成寺伝承の変身過程において「籠り型」、「川渡り型」と変身方法は異なるもののどちらも蛇に変身することを述べた。次の段階として、蛇に変身する意味を考察していきたい。さらに、道成寺伝承では女から蛇へと変身するが、「蛇性の姪」では蛇から女へと変身する。秋成が逆の設定をしている意味を考えてみたい。

道成寺伝承は逃げる男と追う女の構造である。同じ伝承構造は、古くにイザナミ命とイザナキ命の神話の構造があてはまる。道成寺伝承はイザナミ命伝承やヒナガヒメ伝承の延長線上におかれる伝承と考えられている。^{注10} ならば、イザナミ命やヒナガヒメが蛇神ということが仮定できるだろう。それは道成寺伝承に不可欠な要素がイザナミ命伝承とヒナガヒメ伝承に共通しているためである。道成寺伝承、イザナミ命伝承、ヒナガヒメ伝承は、それぞれ女が蛇身であり男との関わりを持つ。さらには伝承構造の中で男の逃走、女の追跡の構成が記されており、分離（別れ）の構造も描かれている。道成寺伝承の場合は、女は蛇に変身する、女は若い僧に求愛する、僧の逃走と女の追跡、若い僧が焼き殺されることによる女との別れという構造があてはまる。これらの共通点は道成寺伝承の構造において不可欠な要素である。蛇という点や道成寺伝承の根底に二つの伝承が取り入れられていると仮定すれば、蛇に変身する意味の一つではないかと考えられる。なお、これらの伝承構

造については第二章第二節「眞女子の人物像の考察」で再び考察してみたい。さらに勝倉壽一氏は『雨月物語構想論』の中で以下のように述べられている。引用が長くなるが記しておく。

女の愛執深く蛇鬼に変貌することは、中世説話の通念となっていたが、このような女人変身談には、男の背信に対する怒りと愛を信じた自らに対する羞恥とが等量の重みを持っている。蛇や鬼への変貌は、愛を単純化し、ひたすら求め続ける潔癖さが行きつくところの究極の姿であり、世の秩序に順応した人間の愛と交わることを許されないことを確認していく悲劇を象徴している。^{注一}

道成寺伝承の女も若い僧の言葉信じてひたすら待ち続けた。だが若い僧は約束を破る。裏切った僧への怒りだけでなく信じ続けた自らへの恥に対するものが、女が僧を追う行動に移させたのである。その怒りをどうしても解消させたいと考え、若い僧を執念深く追うのかもしれない。蛇について『日本国語大辞典』では、「(比喩的に) 執念深いこと」と表現している。蛇は再生の象徴であると同時に執念深い意味を持っている。つまり蛇に変身することは、女の若い僧の裏切りに対する怒りや、僧を信じた自らへの羞恥心の怒りによって女を蛇に変身させたのである。同時にそれは、純粹にひたすら若い僧を待ち続けた女の情念の深さが蛇を象徴する執念深さへと繋がり、女を蛇に変身させたのではないかと想像する。

そして、道成寺伝承では女から蛇へと変身しているが、「蛇性の姪」では蛇から女へと変身している。秋成が「蛇性の姪」を構想するにあたり逆の設定をしている意図を考えてみたい。「蛇性の姪」の眞女子は蛇から美しい女性へと変身している。蛇から人間へと変身するものに三輪山伝説がある。『古事記』と『日本書記』に収められている三輪山伝説は、『記』『紀』ではそれぞれに内容が異なる。『古事記』は「苦環伝承」とされるもので『日本書記』は「箸墓伝承」とされるものがこれにあたる。この三輪山伝説は、後で第三章第四節「三輪山伝承との関係」において詳しく考察するので本節ではあまり述べないこととする。二つの伝承に共通する神は大物主神である。大物主神は蛇神である。偉大な力を持ち、『古事記』の三輪山伝説に登場する活玉依毘売や、『日本書紀』の三輪山伝説に登場する倭迹迹日百襲姫命のもとへ通う時は、蛇から人間へ変身してそれぞれのところへ訪れる。蛇から人間へ変身する設定はこれらの伝説から考えられたと指摘できる。しかし大物主神は男神である。「蛇性の姪」の眞女子は女であるため性別が異なる。性別を女と設定したのは道成寺伝承から取られたものだと考えられる。なぜなら「蛇性の姪」には道成寺伝承の

要素が組み入れられているからである。舞台が紀伊国である点、眞女子が豊雄を追いかける点、最終的に二人は別れて離れる点などがあげられる。性別を女としたことは道成寺伝承からきたものだといえるだろう。また説経浄瑠璃の『小栗』における、大蛇が小栗に一目惚れし、美しい姫に変身して鞍馬寺で小栗と契る場面で蛇から女への変身を行っている。『小栗』はのちに、第二章第四節「豊雄を救う三人の人物」の鞍馬寺の僧の問題点の中で詳しく述べる。鞍馬寺の僧は、『小栗』からきたものだと考えられている。つまり秋成は、女から蛇へと変身する設定に『小栗』を読み、ヒントを得た可能性はあるだろう。『小栗』は室町末頃までには成立したとされている。秋成が逆の設定をした意図に、大物主神が蛇神であり蛇から人間へ変身する点及び道成寺伝承だけでなく、『小栗』から取り入れられた点も含まれていると考えられる。読者が道成寺伝承を連想させると同時に『小栗』も連想させることを意図したのではないかと想像する。

六、道成寺伝承と「蛇性の姪」の関係

第一章第一節の最後の問題点として、道成寺伝承と「蛇性の姪」はどのように関係しているのか述べていきたい。

第一に道成寺伝承と「蛇性の姪」の舞台がどちらも紀伊国である。第二に豊雄が石榴市へ移動し眞女子も石榴市に訪れる点は、道成寺伝承の逃げる男と追う女の設定があてはまる。第三に、「蛇性の姪」では石榴市・泊瀬が舞台に設定されている。泊瀬は、歌枕で「隠国の泊瀬」といわれている。籠ることから変身過程の「籠り型」と関連すると考えている。また、芝の里で富子に乗り移った眞女子は、鞍馬寺の僧が退治しようとしてそこへ向かうまでに寝屋に籠っている。鞍馬寺の僧が寝屋の戸を開けるのを待ち構え蛇に変身していた。この場面は「籠り型」と関係しているだろう。籠って蛇に変身することからいえる。対して「川渡り型」は、吉野で眞女子とまろやの正体が當麻の酒人に見破られてしまい、二人が宮滝に飛び込み逃げる場面で「川渡り型」を連想する。第五に鞍馬寺の僧が眞女子を退治しようとするが、返り討ちに遭い毒氣にあたり「水灌ぎなどすれど、つひに死ける」と亡くなってしまう。この「水灌ぎなどすれど、つひに死ける」という描写は道成寺伝承の中で、追いかけてきた大蛇が、若い僧の隠れている鐘に巻きつき尾で叩き続け、炎があがる。大蛇が去って行くと、道成寺の僧たちが水をかけて火を消し、若い僧を助け出そうとするが、若い僧は亡くなってしまいう描写を連想させる。そして、「蛇性の姪」の中で芝の里という場が登場する。鵜月氏は「芝の里」が芝村の周辺であることを述べている。^{注三}この芝村は

道成寺伝承の清姫の生誕地「真砂の庄」であるといわれている。つまり芝の里と道成寺伝承は大いに関連する。また真女子という名は、「道成寺縁起」や謡曲「道成寺」の舞台となる「真砂」や「まなご」からきているものと考えられる。

注一 阿部真司『蛇神伝承論序説』 新泉社 一九八六年九月三〇日 一四三頁

注二 前掲 阿部真司『蛇神伝承論序説』 新泉社 一四三頁

注三 前掲 阿部真司『蛇神伝承論序説』 新泉社 一四四頁

注四 「角川日本地名大辞典」編纂委員会 竹内理三 編

『和歌山県 角川日本地名大辞典 30』 角川書店 昭和六〇年七月八日

一〇一九頁

注五 岩崎武夫『さんせう太夫考―中世の説経語り』 平凡社 昭和四八年五月二八日

一四三頁

注六 福田アジオ 新谷尚紀 湯川洋司 神田より子 中込睦子 渡邊欣雄 編

『日本民俗大辞典 下』 吉川弘文館 二〇〇〇年四月二〇日 六〇四頁

注七 石上堅『日本民俗語大辞典』 桜楓社 昭和五八年四月一五日 一二五六頁

注八 先掲 阿部真司『蛇神伝承論序説』 新泉社 一四二頁

注九 前掲 阿部真司『蛇神伝承論序説』 新泉社 一五〇頁

注一〇 前掲 阿部真司『蛇神伝承論序説』 新泉社 一二八頁

注一一 勝倉壽一『雨月物語構想論』 教育出版センター 昭和五二年九月一〇日

三〇九頁

注一二 日本国語大辞典第二版編集委員会 小学館国語辞典編集部 編

『日本国語大辞典 第二版 第十二巻』 小学館 二〇〇一年二月二〇日

一二六九頁

注一三 鵜月洋『雨月物語評釈』 角川書店 昭和四四年三月一〇日 五三九頁

表① 道成寺伝承の文献一覧

	成立	概要
大日本国 法華經驗記	一〇四〇～ 一〇四四年	説話。鎮源編。「本朝法華驗記」とも呼ばれる。『法華經』の威力を実証するための法華持経者の伝および靈驗説話を集成した仏教説話集。比丘、沙弥、比丘尼、優婆塞、優婆夷、異類の順に構成される。「紀伊国牟婁郡の悪しき女」は、異類に分類される。
今昔物語集	①一一〇〇年代 前後 ②一一一〇～ 一二二〇年代	説話。選者不明。天竺（インド）・震旦（中国）・本朝（日本）の三部構成。「紀伊国道成寺僧寫「法華」救「蛇語」は卷十四なので本朝部に分類される。『大日本国法華經驗記』と内容が類似しているため、道成寺伝承の古い年代のものといえる。
元亨釋書	元亨二 （一二三二）年	伝記。虎関師鍊著。伝・贊・論・表・志の五格から構成されている。道成寺伝承は『元亨釋書』卷第十九であり「伝」に分類される。
道成寺縁起	応永三四 （一四二七）年	縁起・絵巻。（上巻）熊野詣の秀麗な僧に恋慕した宿の女は、僧の下山に気づくや蛇身と化しつつ追いかけて日高川を渡る。（下巻）道成寺の釣鐘内で焼き殺された僧は大蛇に転生し女と夫婦になるが、二人は寺僧の供養で天人に生まれかわる。本縁起では、僧の本拠地や女の出自が特定されてくる。作者未詳。
謡曲 道成寺	永正 （一五〇四）～ 一五二〇）年 以前に成立	謡曲。四番目物。作者未詳。能全体は、道成寺伝承の後日物語で、道成寺の僧（ワキ）が道成寺伝承について語る場面が登場し、その道成寺伝承を比較対象とする。長唄「紀州道成寺」等近世音曲に影響を与え道成寺物を生んだ作品とされている。
道成寺 清姫和讃	宝暦 （一七五一）～ 一七六四）年 以前に成立	和讃。和讃は諷踊される和語で三宝（仏・法・僧）を讃嘆する歌詠である。「道成寺清姫和讃」は仏教に分類される。また和讃は、ほぼ七言の訓読にならう趣の七五音的な句を連ねる形式とされる。この和讃には「清姫」の名が登場している。

表② 道成寺伝承の比較項目一覧

①舞台となる場所 ②男の設定 ③女の設定 ④二人の出会い ⑤求愛方法 ⑥男の約束 ⑦約束破棄
⑧変身方法 ⑨鐘に籠る男の行方 ⑩後日譚

⑩	⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①	
変わる 天に生まれ に僧は兜率 女は忉利天	なる と塵のみに 焼け尽き灰	籠り型	女 の所に寄 らずに帰る	君が情に随 ふべし	「見始めし 時より、交り 臥さむの志 あり」と求愛 する	僧が熊野詣 の途中で女 の宿に投宿	寡婦	沙門	牟婁郡	験紀
変わる 天に生まれ	のみになる 焼け尽き灰	籠り型	逃テ過ヌ	君ノ宣ハム 事ニ随ハム	「見始ツル 時ヨリ、夫ニ セムト思フ」 と求愛する	僧が熊野詣 の途中で女 の宿に投宿	女	僧	牟婁ノ郡	今昔
変わる 天に生まれ	なる と塵のみに 焼け尽き灰	籠り型	過」と帰る	「不レ入急奔 と約束する 「歸途必来」	夜中女は安 珍の所にや つてきて思 いを打ち明 ける	僧が熊野詣 の途中で女 の宿に投宿	寡婦	安珍	牟婁郡	元亨
変わる 天に生まれ	ある 墨のよう 骸骨になり	川渡り型	女 の所に寄 らずに帰る	下向の時仰 に随ふ	女は「世の契 こそ承候へ」 と求愛する	僧が熊野詣 の途中で女 の宿に投宿	庄司の娘	僧	室の郡眞砂	縁起
ナシ	え失せる 焼かれて消	川渡り型	ナシ	約束しない で逃げ出す	女は山伏に 「急ぎ迎へ 給へ」と求愛 する	山伏が莊司 の所を宿坊 として泊ま る	莊司の息女	山伏	まなご	謡曲
仏する 女と共に成	る 蛇道へ落ち	川渡り型	ナシ	約束しない で逃げ出す	女は安珍に 愛を打ち明 ける	女が熊野参 りの安珍に 一目ぼれす る	庄司の愛娘	安珍	眞名子	和讃

第二章 原典「白娘子永鎮雷峯塔」と「蛇性の姪」

第一節 豊雄の人物像の考察

「蛇性の姪」の男主人公・豊雄は、紀の國三輪が崎に住んでいる。大宅竹助の末っ子であり、大宅家は大勢の漁師を抱えた網元として栄える。それだけにとどまらず大宅家は三輪が崎一帯の里長も務める家柄である。太郎は「質朴にてよく生産を治」めて家を守る。それに対して、豊雄は「生長優しく、常に都風^{みやび}たる事をのみ好（み）て、過活^{わたらひ}心なかりけり」という、文学などの学問ばかりを学び生計を立てることや生活意欲のない男性として描かれている。勤労を好まず風流なものばかりに興味を持つ。太郎とは対照的な人物である。以下には豊雄の外見や性格などの人物像を考察していき、秋成が豊雄をこのように設定した意図について考えていきたい。

まず豊雄の外見や性格を考えてみたい。眞女子が豊雄を見て「面さと打（ち）赤めて恥かしげなる形」とした眞女子の行動から、豊雄は容姿の美しい男性であろう。豊雄は、優しい性格であるが風流なことを好む「過活心」のない男性である。そのような彼を父母は、「家財^{たから}をわかちたりとも即^{やがて}人の物となさん。さりとて他の家を嗣^{つが}しめんもはたうたてき事聞（く）らんが病^{やま}しき。只なすまゝに生し立て、博士にもなれかし、法師にもなれかし、命の極は太郎が羈^{ほたし}物にてあらせん」と考えていて、豊雄のやりたいことをやらせていた。両親は末っ子の豊雄を甘やかしているようにみえるが、一方で非生産的な彼を持て余しているようにもみえる。本来ならば豊雄は、将来太郎の右腕となり彼を支えていき大宅家を守っていく存在となるはずだが、「過活心」がないあまりに家族から持て余されている存在となっている。すなわち非生産的な余計者なのである。父や兄が「生産を治」めている生産体系に入る働き者であるのに対して、豊雄は働くことより学問を好む性格から生産体系から外れている存在と考えられる。鵜月洋氏は『雨月物語評釈』の中で豊雄を以下のように考察している。

末っ子で甘やかされ、生来勤労を好まず、かえって浪費的な文学や学問、風流韻事を好むというのでは、どんなにその性格がよくても、所詮は家庭内においてはもてあまし者であり、世俗的には失格者に近かった。^{注一}

豊雄は優しい性格の青年であるが、男性とは家を守ることを最も大切なこととみなす当時の思想から考えたならば、失格者とみなされるほどの人物である。性格が優しくても非

生産的な人物は余計者といえるであろう。ゆえに大宅家を守ることを重視し、生産体系に入る父母や兄は勤労を好まない生産体系から外れている豊雄を持て余しており、逆に、大宅家を守ることから離れている姉は、「生長優し」い正直者で素直な豊雄を放っておくことができず可愛がるのだろう。

また豊雄は「常に都風たる事をのみ好」む性格である。風流なことを行いながら暮らす。文学や学問を学び和歌などを詠むと想像する。二人の出会いの場面で、豊雄が眞女子に人となりを尋ねた時に「くるしくもふりくる雨か三輪が崎佐野のわたりに家もあらなくに」と和歌を引用する点から推測する。それは、豊雄が貴族のたしなむものに興味があり、貴族に憧れを抱くことによるだろう。豊雄は眞女子の美しい姿に惹かれ、彼女に「貴なるわたりの御方とは見奉る」と尋ねる。彼が眞女子に惹かれた理由として、眞女子の美しさだけでなく、彼女の上品な立居振舞いから都会の高貴な女性と思っただけに惹かれたのであろう。つまり都会への憧れも持っていると考えられる。さらには眞女子に対して「かうすざましき荒礪を何の見所ありて狩くらし給ふ」と尋ねる。このような殺風景な荒礪を何が気に入って訪れたのですかと解釈する。豊雄は三輪が崎を田舎と考えており、眞女子への質問によつて都から来た高貴な人に憧れを抱くという豊雄の人物像がみえてくる。豊雄の「常に都風たる事をのみ好（み）て」とは、ただ風流なものを好み学問に励んでいるのではなく、都会への憧れを抱くために文学や学問を学ぶのであるといえる。

しかし過活心を持たない豊雄は、物語が進むにつれて徐々に「丈夫心」^{ますらを}を持つとうとする人間へと変わっていく。それは彼が成長していくともいえる。きっかけは、豊雄、眞女子、まろや、姉夫婦の五人で吉野へ花見見物に行った時のことである。當麻の酒人は、眞女子Ⅱ蛇という彼女の正体を見破り、眞女子とまろやはその場から逃げてしまう。豊雄は當麻の酒人によつて眞女子の本来の姿を知り、當麻の酒人は豊雄に対して、「你又畜^{かれ}が假の化に魅はされて丈夫心なし。今より雄氣してよく心を静まりませば、此らの邪神を遂はんに翁が力をもかり給はじ。ゆめく心を静まりませ」と諭した。この助言で豊雄は「此年月畜から現実を直視しようとする性格への変化がみられるだろう。「常に都風たる事をのみ好（み）て、過活心なかりけり」であつた豊雄は、心を静めて冷静になり「丈夫心」を持つとうとする男性へと変わろうとしていく。當麻の酒人の忠告を素直に聞き入れたためである。「過活心」を持たない豊雄が「丈夫心」を持つとうするのは、彼の成長を示すと考えられよう。吉野の事件から豊雄は紀の國へ帰り芝の里に移動する。豊雄は富子と結婚するが、

結婚二日目の夜に富子に乗り移った眞女子が現れる。その後鞍馬寺の僧が眞女子を退治しようとするが、振り返りに遭い命を落としてしまう。豊雄は「おのが命ひとつに人々を苦しむるは実ならず。今は人もかたははじ。やすくおぼせ」と決断し、眞女子から逃げずに立ち向かおうとする。自分の命のために人々を苦しめるのは誠実なことではないと考える豊雄は、「過活心なかりけり」のような以前の豊雄ではないことを示している。

よって豊雄の人物像は、美男であり、すでに述べたように「生長優しく、常に都風たる事をのみ好（み）て、過活心なかりけり」という勤労を好まない、生産体系から外れた余計者である。「生産を治む」兄とは対照的な人物といえる。いくら優しくて素直な性格の良い男性だとしても、家を守ることを一番に考える当時の社会の中では、豊雄は家族の生産体系の中で排除された人物である。将来大宅家の家長となる兄を支え、兄とともに家を存続させようと努めるべきはずなのにそれをしようとせず、学問ばかりに興味を持ち、家のために働こうとしない豊雄は失格者に近い存在であった。

そのうえ風流なものに興味を持つ彼の性格は、都会や貴族への憧れを持ったためだと考察する。それは都への夢を見て、現実には目を向けない夢見がちな性格を表す。さらに眞女子に心惹かれる豊雄を田中憲二氏は、「雨月物語」論―豊雄の人物設定―の中で「蛇の化身に魅入られる弱さを付与された人間」と指摘している。^{注二}つまり物語の前半の豊雄は、美男で性格の良い人物であるが、「過活心」のないうえに弱さを持ち、都会に憧れる夢見がちな弱々しい一面を持つ人物と考察する。しかし、後半の豊雄は當麻の酒人の忠告などから夢からさめて現実の世界に目を向けようとし、次第に「丈夫心」を持つまでに成長していく人物へと変化する。それは當麻の酒人の忠告を聞く豊雄の正直で素直な性格によるもので、豊雄の人物像を一言でまとめるならば、優しく素直な性格の男性と考えられる。

ここで原典「白娘子永鎮雷峯塔」^{注三}の主人公・許宣について述べておきたい。なお章末に表③として「白娘子永鎮雷峯塔」と「蛇性の姪」の対照表を附している。許宣は、十二歳の若者で、叔父が経営する薬屋の番頭として働いている。幼い時に両親を亡くし姉夫婦と一緒に暮らす独身の青年であり、真面目な性格である。美男とも設定されている。それに対して豊雄は、勤労を好まない風流なことばかり興味を持つ美男の優しい性格の青年である。「蛇性の姪」は「白娘子永鎮雷峯塔」を典拠とする。当然だが、豊雄と許宣は美男である点以外はそれぞれ異なった人物と創造されている。では次に秋成が豊雄をこのように設定した意図について考察したい。

秋成が豊雄を構想した意図としてまず考えられることは、秋成は自分の青年時代の姿を

豊雄に重ねて創造したとされる。秋成は、「後年みずからの青年時代を振返って「浮浪子」^{のらもの}と称し、文学青年としてかなり自由放縦の生活を送ったと述懐している」^{注四}のならば、豊雄の「常に都風たる事をのみ好（み）て、過活心なかりけり」という設定は、秋成自身からきたものだと考えられる。

「白娘子永鎮雷峯塔」は、雷峯塔の由来にまつわる民話の一つといわれる。勝倉壽一氏の『雨月物語構想論』には、「白娘子永鎮雷峯塔」を「講釈家の講釈の台本（話本）」^{注五}と指摘している。また、「どこにでもいそうな男女が登場し、物語はどこにでも有りそうな出来事を取りあげられている」^{注六}とも述べている。原典「白娘子永鎮雷峯塔」の興味は奇談にあるといえよう。ゆえに、許宣は美男で真面目な性格というありきたりな人物像が設定されたのだろう。どこにでもいるような男性が奇談に巻き込まれるためには、豊雄のような「過活心」がない個性が明確に表れている人物ではなく、個性が表れていない不特定な人物を構想したのではないか。「蛇性の姪」の豊雄は、前半「過活心」のない性格から吉野での事件をきっかけに後半「丈夫心」を持つようになる。この作品の中に描かれたものの一つに、男主人公の人間的成長が描かれている。つまり、「蛇性の姪」は男主人公が奇談に巻き込まれる構成だけでなく、そのことにより「過活心」のない人間であったのが「実心」を持つうとして「丈夫心」を手に入れる人間的に成長する点も描かれている構成となっているのである。

以上のように、豊雄を構想するにあたり、その一つの要素に「浮浪子」と称した秋成自身が影響されたことと、「過活心」のない非生産的な人間が、奇談に巻き込まれ、そこから人間的に成長していくという構想を考えて、豊雄という人物像を創造したのだろう。さらには、「過活心」のないという、浮世草子などに登場する男たちの延長として描いたことも含まれるだろう。それらをふまえて豊雄の人物像は、二十二歳の薬屋で働く美男の真面目な青年とだけ描かれている原典「白娘子永鎮雷峯塔」の許宣とは異なり、「常に都風たる事をのみ好（み）て、過活心なかりけり」という、性格がはっきりと示された人物に描かれているのである。

第二節 眞女子の人物像の考察

「蛇性の姪」の女主人公・眞女子は、「顔容髪のかゝりいと艶ひやか」なことから、た

いへん美しい女性と考えられる。豊雄はその美しさに心惹かれる。一体、眞女子とはどのような人物であろうか。眞女子の本来の姿は大蛇である。この節の最後に秋成が眞女子を設定した意図について考えてみたい。はじめにテキストから眞女子の人物像を考察していきたい。

一、眞女子の人物像の考察

では最初にテキストから眞女子の外見、性格、行動などを抜き出し、眞女子の人物像を考える。眞女子の外見は、「麗しき聲」をして「年は廿にたらぬ女の、顔容髪のかゝりいと艶ひやか」な容姿の女性である。「遠山ずりの色よき衣」を着て、侍女を連れた都会から来た身分の高い女性と想像する人物に描かれている。「常に都風たる事をのみ好」む都会に憧れを抱く豊雄の理想的な女性に描かれているといえよう。眞女子は豊雄を見て、「面さと打（ち）赤めて恥かしげなる形」から上品な立居振舞いをする。豊雄は「見るに近まさりして、此世の人とも思はれぬばかり美しき」の眞女子の外見や行動に惹かれている。たいへん美しく上品な眞女子を「貴なるわたりの御方」と想像し、彼女の人となりを尋ねることから、豊雄は眞女子をひとめ見た時からすでに好意を寄せていたと考えられる。後に豊雄は眞女子の家を訪ねる。その家は、「門高く造りなし、家も大きなり」といった立派な家であり、「板敷きの間に床疊を設けて、几帳、御厨子の饒、壁代の繪なども、皆古代のよき物にて、倫の人の住居ならず」と、平安王朝の雰囲気を漂わせた家に暮らす、美しい上品な女性である。眞女子は豊雄の理想の女性と設定されたのである。

眞女子は、都会に住んではない。「故は都の生なるが、父にも母にもはやう離れまいらせて、乳母の許に成長しを」とあるように、都会の生まれで両親をすでに失い、この国の県の何某という者の妻に迎えられた。しかし、「夫は任はてぬ此春、かりそめの病に死給ひしかば、便なき身とはなり侍る」ことから、夫も亡くなり寡婦となつてしまったのである。女が寡婦である設定は原典「白娘子永鎮雷峯塔」の白夫人と共通している。

しかし眞女子の正体は蛇である。蛇から女性へ変身したのである。物語は次第に眞女子の本来の姿を描いていくようになる。それは、眞女子が「千とせの契」に豊雄へ太刀を贈りその太刀が権現様の奉納品であり、豊雄が盗人として捕えられてしまう事件があげられる。豊雄が事情を話し武士とともに眞女子の家へ行った時、王朝的な家であったものが「厳めしく造りなせし門の柱も朽くさり、軒の瓦も大かたは砕おちて、草しのぶ生さがり、人住（む）とは見えず」となっていたのである。その廃虚のような家の中に眞女子らしき女

が座っていて、その女は「花の如くなる女」と、花のように美しく可憐な様子をしている。
巨勢こせの熊鷹くまがしが女に近づき捕えようとした時、「霹靂鳴響はたらがみ」き女は消えてしまう。この出来事から大宮司は妖怪の仕業であったことを悟り、豊雄の罪は、盗品を携えていた罪だけ残った。

この事件で豊雄は姉夫婦が住んでいる石榴市へ旅立ち、眞女子も豊雄を追いかけて石榴市へ行く。二人が再会した時に豊雄は眞女子を拒絶したが、眞女子は誤解を解こうと豊雄に訴える。そして「此女しきふるまひを見て、努疑ゆめふ心もなく」と眞女子の立居振舞いから姉夫婦を納得させる。眞女子の言い分が筋が通っているだけでなく、眞女子が美しく女らしく振る舞う姿が人々をひきつける。それは姉夫婦だけでなく豊雄にもあてはまる。豊雄は眞女子と再会した時、「又逐來また（り）て何をかなす。すみやかに去れ」と拒絶していたが、次第に怒りが治まっていく。豊雄は眞女子の「容姿のよろしきを愛よろこ」んでいたので夫婦となることからも考えられる。

以上のように、二人が三輪が崎で出会い、石榴市で夫婦となるまでの眞女子についての表現をあげたが、眞女子はたいへん美しい女性と設定されている。性格など内面の描写よりも外見やしぐさなどの外面の描写が主に描かれている。具体例として「顔容髪のかゝりいと艶ひやか」や「此世の人とも思はれぬばかり美しき」などである。また、「面さと打（ち）赤めて恥かしげなる形」や「此女しきふるまひ」という表現も眞女子の美しく上品で女性らしいイメージを強調するのである。それに対して眞女子の内面を考えると、豊雄に贈った太刀は、豊雄に喜んでもらおうと思ったために贈ったものである。喜んでもらいたいたいという純粋な気持ちから盗んだと考えられる。本来の姿は蛇であるため、物を盗む行為が罪になることは知らない。眞女子には人間のルールは理解できないであろう。眞女子の純粋な気持ちから起きたのである。豊雄と石榴市で結婚するまでの眞女子は、美しく上品な「女しきふるまひ」を持つ女性と設定されている。「此世の人とも思はれぬばかり美しき」などの描写から、作中に彼女の外面的な描写が主に描かれている。眞女子は、たいへん美しい女性であり、上品な立居振舞いをする魅力的な女性と設定されている。

豊雄、まろや、姉夫婦と吉野へ花見見物に行った時でも「人く花やぎて出（で）ぬれど、眞女子が麗なるには似るべうもあらずぞ見えける」ことから、眞女子の美しさは強調されている。しかしこの花見見物の時に、眞女子の正体が當麻の酒人によって見破られてしまい次第に純粋な性格とは別の「執ねき」という一面を見せ始める。當麻の酒人は、眞女子について「此邪神あしきかみは年經おとぢたる蛇なり。かれが性は姪つみなる物にて、牛と犂りんみては鱗を

生み、馬とあひては龍馬を生といへり」と語る。眞女子の本当の姿が老いた大蛇であることを豊雄は知るのである。

さらに眞女子は豊雄を追いかけて石榴市へ来る点から執念深さが感じられる。それだけではなく、吉野での事件後、豊雄は芝の里の芝の庄司の女子・富子と結婚し芝の里へ移る。結婚して二日目の夜に眞女子は富子になりすまし豊雄の前に姿を現す。豊雄を追いかけることから彼女の執念深さがみてとれる。豊雄が移動するように眞女子も移動するので、道成寺伝承の逃げる男と追う女の構造があてはまる。眞女子の内面の特徴に純粹だが執念深い性格がいえる。

また眞女子は、豊雄に向かって「他し人のいふことをまことしくおぼして、強ちに遠ざけ給はんには、恨み報ひなん。紀路の山くさばかり高くとも、君が血をもて峯より谷に灌ぎください。あたら御身をいたづらになし果給ひそ」と脅迫する。豊雄を我がものにしたい願望により、彼を脅すことがうかがえる。そして美しい女性であった眞女子はついに本来の蛇の姿に戻ってしまう。それは、鞍馬寺の僧が豊雄たちの依頼で眞女子を退治しようと呼ばれる場面である。「此頭何ばかりの物ぞ。此戸口に充滿て、雪を積たるよりも白く輝くしく、眼は鏡の如く、角は枯木の如、三尺餘りの口を開き、紅の舌を吐て、只一呑に飲らん」という蛇に戻った。愛する豊雄が自分を退治するため僧を呼んだことに對する眞女子の怒りが蛇に戻らせたのだろう。蛇は眞女子に変身し、豊雄に向かい「此後も仇をもて報ひ給はゞ、君が御身のみにあらじ。此郷の人くをもすべて苦しきめ見せなん」と再び脅している。この発言は眞女子にとっては豊雄が自分の願いに従ってくれろと考えたかもしれないが、逆に豊雄に「実心」を持たせるきっかけとなったのだと考える。そして眞女子の最期は、豊雄に袈裟を頭から押しふせられて、「你何とてかく情なきぞ。しばしこゝ放せよかし」と頼んでも聞き入れてもらえず、三尺余りの蛇に戻り法海和尚によって捕えられ鉄鉢に入られて土の中に埋められてしまうのである。

このようにテキストに描かれている眞女子の人物像を抜き出してみたが、二人の出会い、石榴市の姉夫婦のもとで結婚し、吉野での花見見物をするまでの眞女子は、「顔容髪のかゝりいと艶ひやか」のような、上品でたいへん美しい容姿であるうえに、豊雄に喜んでもらいたいという純粋な性格を持つ人物と設定されている。當麻の酒人に見破られるまでの彼女は性格などの内面的な描写よりも外面的な描写が強調されている女性といえる。逆に、當麻の酒人に本当の姿を見破られ豊雄に知られてからの眞女子は、外面的な描写よりも、「執ねき」という内面的なものが強調されている女性と考えられる。眞女子は豊雄に喜ん

でもらいたいために太刀を盗んだ行動が逆に豊雄を窮地に追い込み、豊雄を愛するゆえに追いかける執念深い行動が、眞女子を豊雄から遠ざけていく。自己の思いのままに行動することが却って自分を苦しめるのである。

以上のようにテキストから眞女子の人物像の考察を行った。すると眞女子についてさまざまな問題点が浮かぶ。第一に、眞女子の人物像を考えるうえで外面的な描写が多く描かれている。これらの描写はなにか意味があるのかと問題点が浮かぶ。第二に、眞女子の本来の姿は蛇である。女と蛇の関係について考えていき、なおかつ蛇は水とも関係がある。蛇と女・蛇と水の間を関係を考える。そして第三に、なぜ秋成が眞女子をこのように設定したのかという設定の意図の問題点が浮かぶ。次いでこれら三点の問題点を考察してみたい。

二、眞女子の外面の描写についての考察

眞女子の人物像として本文中には、性格などの内面の描写よりも外見の美しさや女性らしさなどの外面の描写が多く描かれている。本文中に描かれた主な描写をあげると以下のよう記される。

- ・ 顔容髪のかゝりいと艶ひやかに
- ・ 面さと打(ち) 赤めて恥かしげなる形さまの貴あてやかなるに
- ・ 此世の人とも思はれぬばかり美しきに
- ・ 花の如くなる女
- ・ 人々花やぎて出(で) ぬれど、眞女子が麗あてなるには似るべうもあらず
- ・ 麗しき聲

「蛇性の姪」と同様に『雨月物語』の中にはヒロインが登場する。「浅茅が宿」の宮木と「吉備津の釜」の磯良である。二人の外見の描写は眞女子と比べて明らかに少ないといえる。「浅茅が宿」の宮木は、「人の目とむるばかりの容に、心ばへも愚ならずありけり」と半行だけであり、また、「吉備津の釜」の磯良は「うまれだち秀麗にて、父母にもよく仕へ、かつ歌をよみ、箏に工みなり」と描かれている。^{注八}しかし磯良は、本文には彼女の外見は描かれておらず、媒氏の会話の中に登場するだけなので実際の磯良がどのような外見であるのか描かれていない。宮木と磯良はヒロインとされていても眞女子のように詳しく外面の描写は描かれてはいない。秋成が眞女子の外面の描写を描く意味を考えていきたい。

眞女子の外面の描写が多いことは、秋成が眞女子の人物像を創造するにあたり重要な要素であると考えられる。それは彼女の容姿だけでなく彼女の女らしい立居振舞いも含まれ

る。例に、「面さと打(ち) 赤めて恥かしげなる形の貴やかなるに」である点や、眞女子が豊雄に求愛する場面からみられる。原典「白娘子永鎮雷峯塔」の白夫人が許宣に求愛する場面で、許宣が貧乏であるために返事をためらっている和白夫人は心配いらないと許宣に積極的に求愛している。一方「蛇性の姪」では、眞女子が豊雄に求愛し豊雄が返答にためらっていると、彼女は「女の浅き心より、嗚呼^{をこ}なる事をいひ出(で)て、歸るべき道なきこそ面^{おも}なけれ。かう浅ましき身を海にも没^いで、人の御心を煩はし奉るは罪深きこと、今の詞は徒ならねども、只醉^{まがごと}ぐちの狂言におぼしとりて、こゝの海にすて給へかし」と発言するように、男性から一歩引いた女性らしい振舞いや態度を示している。

眞女子の美しい外見や立居振舞いに豊雄は急速に惹かれていく。眞女子の「此世の人とも思はれぬばかり美しき」に魅了されていき、また都会に憧れを抱く夢見がちな豊雄にとって眞女子は自分の理想の女性であることからもういえる。美しく女らしい眞女子の描写や彼女の家の「板敷の間に床疊を設けて、几帳、御厨子の饒、壁代の繪なども、皆古代のよき物にて」から王朝風なものを連想させる。以上の点から読者にも眞女子の美しく女らしい高貴なイメージを印象づけているのではないだろうか。しかし眞女子の本来の姿は蛇であり異類である。ゆえに眞女子は「此世の人とも思はれぬばかり美しき」と表現される程の美しい女性に変身したと考えられる。異類であるからこそ、「人く花やぎて出(で)ぬれど、眞女子が麗なるには似るべうもあらず」と表す程の美しい女性に変身するのは可能なのかもしれない。

豊雄は、婚約の約束として眞女子から贈られた太刀が盗難品であったことで捕えられてしまう事件から姉夫婦のいる石榴市へ移る。追ってきた眞女子を拒絶するものの、次第に打ち解けていき、夫婦となる。しかし姉夫婦とともに吉野へ花見見物をした際に、眞女子とまるやは當麻の酒人に正体を見破られてしまう。この出来事から眞女子の人物像は変化していく。つまり「執ねき」という本性が出る。それ以降、吉野での花見見物をする以前の美しい眞女子の描写は描かれていない。

秋成が眞女子の外面の描写を描く意味を考えていくと、まず、眞女子の本性は蛇である。人間ではない異類なのである。一方冒頭に述べた、「浅茅が宿」の宮木や「吉備津の釜」の磯良は人間である。人間の二人はそれぞれの外見の描写は少ない。つまり眞女子の外面の描写が多いのは異類である点と関係していると考えられる。異類を隠すために彼女の容姿などを強調して描いたのではないだろうか。逆に前述したように、異類であるからこそ「此世の人とも思はれぬばかり美しき」と喩えられるほどの美しい容姿で立居振舞いが可憐な

女性に変身したのである。眞女子は宮木や礒良が持っていない異類の力を發揮して美しい女性に変身したといえる。また勝倉壽一氏の『雨月物語構想論』には以下のように述べられている。

秋成の基本構想の一つが、物語の前半を妖艶な魅力を備えた上流社会の未亡人とロマンチックな恋愛を夢想する青年との愛情模様を中心に描くことによって、蛇性の正体を隠し、後半では、この世の約束事や掟と抵触することによって蛇性を露わにしていく眞女子の姿を描くことによって、話の中心を蛇性の執念と豊雄の恐怖に集中し、物語の怪異性を極度に盛り上げようとするドラマ的な手法を取ることにあつたのである。^{注九}

吉野で當麻の酒人に正体を見破られるまでの前半の眞女子は、美しいうえに女性らしい立居振舞いをする、豊雄に「貴なるわたりの御方」と思われるような女性である。それはやはり蛇性を隠すために彼女の外見の描写を多く描いたと考えられる。

だが眞女子は蛇であつても豊雄を愛する心は純粹でひたむきである。豊雄を落し入れようとする悪意を眞女子は持っていない。ただ彼女は蛇性で異類なので人間社会のルールなどは知らない。眞女子は、「人間の女性がいやおうなしに縛られ閉じこめられている封建道徳とか婦道・婦徳とか女のたしなみとかいう鉄の鎖に、最後の性根においてはまったく縛られていない」^{注一〇}のである。豊雄を一途に追い求めたゆえに人間社会の規則を犯したとしても彼女には理解できない。また當麻の酒人の忠告により、豊雄は人獣婚というタブーを犯し「畜に魅はされしは己が心の正しからぬなりし」と改心し、眞女子から離れようとする豊雄の行動も彼女には理解できていないのである。吉野で當麻の酒人に正体を見破られてからの後半の眞女子は豊雄への執着心を表し、豊雄に「紀路の山くさばかり高くとも、君が血をもて峯より谷に灌ぎください」と迫る。豊雄をどうしても手に入れたいと願うばかりに執心が表れたのである。松本才和氏は「雨月物語の女性―眞女兒・宮木・礒良―」の中で「眞女兒は豊雄を我がものにしたただけであつて心から憎んでいるわけではない」^{注一一}と述べていることから、豊雄を我がものになりたい気持ちと考えられる。

そのように考えていくと、眞女子の豊雄への執心が強いために豊雄の理想と考えられる女性に眞女子は変身したのだろう。都会に憧れを抱く豊雄にどうしても愛されたいために、非常に容姿の美しい女性であり、立居振舞いが女性らしい、可憐である上流貴族のような女性に変身したと考えられる。以上のように、蛇性の正体を隠すただけでなく、眞女子の豊雄を我がものになりたいという願望や執着心が強いためにたいへん美しい女性となり、

眞女子の豊雄への願望や執着心を強調するために、秋成は眞女子の外見などの描写を多く描いたと考えられる。

三、蛇と女及び蛇と水の関係の考察

眞女子は美しい可憐な女に変身する。彼女の本性は年経たる蛇である。次の問題点に、蛇と女の関係について考察していきたい。また蛇と水の関係も考えていきたい。吉野で、眞女子とまろやが當麻の酒人に正体を見破られ滝に飛び込み姿を消す場面において、蛇と水は何か関係があるのではないかと推察している。はじめに蛇と女の関係について考察していく。

眞女子の本来の姿は蛇であり蛇から女に変身する。原典「白娘子永鎮雷峯塔」の白夫人も蛇から美しい女性に変身する。秋成が原典の要素をそのまま取り入れたといえば簡単だがそれだけではない。「眞女子の形象化は言ってみれば日本の蛇神の伝統を踏まえてなされている」といいであろう^{注二}と指摘されているように、イザナミ命伝承などの日本の蛇神伝承が眞女子を創造するうえで基礎になったのだと考えられる。

阿部真司氏は『蛇神伝承論序説』の中で、イザナミ命は蛇神ではないかと考えておられる。理由に、イザナミ命の墓所の一つとされる場所にはイザナミ命が葬られているといわれる塚があり、そこから生える小竹には蛇を退散させる霊力があるといわれている。イザナミ命が小竹に乗り移り蛇を退散させていると考えられ、なぜイザナミ命にそれが可能なのかといえば、イザナミ命は蛇ではないかと考えられているからだ^{注三}という説や、他にも、伝承の中で、見るな（約束）の禁忌↓破る↓二神の分離（別れ）^{注四}という構造が箸墓伝承やヒナガヒメ伝承に共通しており、蛇神に特有なものであるという説などからイザナミ命は蛇神であると仮定している。イザナミ命は女神であり、かつ蛇神であるならば、蛇と女の関係は、イザナミ命を基にして考えられるのではないか。「蛇性の姪」には道成寺伝承の要素も取り入れられている。道成寺伝承の構造も遡ればイザナミ命伝承を基本としたものである。なぜならば、道成寺伝承の中で必要不可欠な逃げる男と追う女という構造の基となつた最も古い伝承はイザナミ命伝承と考えられるからである。イザナミ命伝承と道成寺伝承の二つの伝承構造は以下のようにまとめられる。

A イザナミ命伝承の構造

「見るな」という禁忌（約束のモチーフ）↓禁忌を犯す（約束破棄のモチーフ）↓男神の逃走↓女神の追跡↓両神の分離

B 道成寺伝承の構造

「下向時に立ち寄る」という約束↓僧の約束破棄↓男の逃走↓女の追跡↓二人の別れ
第一章第一節「変身における二つの型と変身の意味」ですでに考察したが、イザナミ命と道成寺伝承は伝承構造だけではなくどちらも女が蛇であり、相手に求愛するなどの男とかかわりを持っていることも共通している。二つの伝承が「蛇性の姪」や眞女子にどう関わるのか考えていく。「蛇性の姪」の構造をまとめると以下のようになる。

C 「蛇性の姪」の構造

二人の出会い（雨の日）↓お互い好意を持つ↓眞女子の求愛↓第一の愛の破綻↓豊雄は石榴市へ移る（男の逃走①）↓眞女子と再会（女の追跡①）↓二人の結婚↓吉野での眞女子の正体が見破られる・第二の愛の破綻↓豊雄は芝の里へ移る（男の逃走②）↓眞女子が富子に乗り移る（女の追跡②）↓豊雄は丈夫心を持つとうとする↓眞女子との対決↓眞女子の敗北↓二人の別れ

「過活心」のない豊雄が、物語が進むにつれて「丈夫心」を持つとうと成長することや、「此世の人とも思はれぬばかり美しき」といわれた眞女子が、次第に執心を表面に出すことを除いて構造を見ていくと、男の逃走のモチーフ、女の追跡のモチーフ、二人の別れのモチーフなど、前の二つの伝承と主要な構造は共通する。また「蛇性の姪」で、眞女子が豊雄に求愛するという女から男への求愛のモチーフも前の二つの伝承と同様である。したがって、眞女子の人物像を考察していくうえで蛇と女の関係は、逃げる男と追う女の伝承構造の基本とされたイザナミ命伝承まで遡って考えていくことができるのかもしれない。原典「白娘子永鎮雷峯塔」の白夫人が蛇であるという原典の要素をそのまま取り入れるだけでなく、イザナミ命や道成寺伝承の要素をふまえて、秋成は眞女子の人物像を創造したのだといえる。

次に蛇と水の関係について考えてみたい。冒頭で述べたように、吉野での花見見物の際に當麻の酒人により眞女子の正体が見破られ、眞女子は滝に飛び込み姿を消す場面で水と蛇の関係が考えられる。次いで蛇と水の問題点として考察する。

第一章第一節「変身における二つの型と変身の意味」の「川渡り型」の考察の中で述べたが、水は古くから霊力を持っており人々に活力などを与えている。霊力を持つと信じられていたのならば、水の流れは遠く霊界へとつながっているといえる。^{注一五}また、水の背後に神が存在していると考えられている。つまり水神である。水神は蛇や河童などがあるといわれている。眞女子が當麻の酒人に正体を見破られ滝へ飛び込んだ後に、「水は大・に湧あ

がりて見えざるほどに、雲摺墨^{するすみ}をうちこぼしたる如く、雨篠を乱してふり来る」となる。

「滝にとびこみ雲を支配し雨をふらせる術は、まさに水の支配者＝水神の様相を帯び雷神の面影さえも彷彿としてくる」^{注一六}と述べられている。雨を降らせる行為は、水を操ることのできるもの、つまり水神しかできない術だろう。眞女子は蛇であり、蛇は水神としての一面をみることができる。眞女子も水神である一面を持っていると考えられる。

また、「蛇と女の関係」について考察したように、蛇と水の関係を日本の蛇神の伝承からふまえて考えていくと、ヒナガヒメ伝承と関係するといえよう。ヒナガヒメも蛇であり蛇神なのではないだろうか。ヒナガヒメ伝承はイザナミ命伝承における、男の逃走・女の追跡などの重要なモチーフをふまえているのでそのように考えられる。ヒナガヒメ伝承には、覗くという約束破棄、男の逃走、女の追跡のモチーフが描かれている。さらにこの伝承の中に蛇と水が関係するのは、ホムチワケがヒナガヒメの蛇の姿を見て、ホムチワケは逃走する。それを追うヒナガヒメは、海原を照らし舟に乗って追跡する。海原の中を追う点は水に関係するといえる。さらに二人の出会い^{ひのかわ}は肥河の中流であることから水と関係している。よって蛇と水の関係は、蛇が水神の一面を持つ点や、ヒナガヒメ伝承と関係する点などから眞女子の人物像を考察できるだろう。吉野で眞女子が滝に飛び込む描写は、道成寺伝承の川を渡りながら大蛇に変身する「川渡り型」の要素やこれまで説明した二つの点から構成されたのであろう。

四、秋成が眞女子を設定した意図の考察

眞女子の人物像を考察してきたが、最後に秋成が眞女子をこのように設定した意図を考えていきたい。

眞女子の人物像は、吉野で正体を見破られる後半の彼女の執念深い点を除くと、豊雄への愛情は純粹でひたむきなものであるといえよう。すなわち人間が抱く愛情と変わらない。だが眞女子は人間ではない異類である。眞女子が異類である時点で豊雄との愛は破局を迎えることが想像できる。また、異類とわかった時点で眞女子は人間社会から排除され、認められていない。さらに、眞女子の愛する人に求愛するという積極的な行動や、後半の豊雄を我がものにしたという独占欲は、当時の封建制度下の女性には認められないものであった。封建制度下の女性の恋愛は自由ではなかったが、古代王朝の女性の中には恋愛に積極的で自主的な女性が存在したという。『雨月物語評釈』には、古代王朝時代を物語の背景に設定したと関連させて以下のように述べられている。

（古代王朝の女性の中には恋愛に自主的・積極的であり、またそれを認めていた社会であったことから）

その本然的で純粋な人間性情を現実求め、現実復活させることは不可能であっても、それが純粋への志向であり理想と夢への追求であるならば、文学の上にそれを求め、それを描くことは可能である。^{注二七}

封建制度下での女性が、純粋で積極的に自由恋愛をすることは容認されなくても、純粋で古代王朝の女性のような恋愛に積極的であるという理想を抱いた点が、秋成が古代王朝を背景とした設定にした意図といえよう。その意図が眞女子の人物像の設定へと繋がっていくと考えられる。蛇性である眞女子は、封建制度下の女性たちのように封建道徳や婦道などに縛られておらず、あくまで恋愛に積極的に自主的である。純粋に豊雄の愛を求めただけである。原典「白娘子永鎮雷峯塔」の要素を取り入れて、なおかつ蛇性の眞女子を人間に変えて封建制度下の女性とは容認されない、恋愛に積極的な人物を描いたのだろう。それは、蛇性Ⅱ異類は人間社会のルールを知らないからこそ描くことができたのかもしれない。また、異類との恋愛は最終的には破綻を迎えると連想しつつも、愛に執着するという作品の基本構想を秋成が考えたため、眞女子が創造されたのではないだろうか。しかし秋成は、封建社会の秩序や道徳などを打ち破って自由な恋愛をしようと主張しているのではない。ただ秋成は、人間の純粋な性^{さが}を求め続けた結果、封建社会の中の女性の性情にあわれみと同情をおぼえるとともに、人間性のゆがみを見たから眞女子の人物像を創造しようとしたのである。

したがって秋成の意図としては、蛇性を人間に置き換えて、異類の積極的に自主的な純粋な愛と封建社会の恋愛のゆがみを描くために、眞女子の人物像を設定したのではないかと考えられる。

第三節 豊雄における「家の問題」

豊雄は、父母、兄夫婦と暮らしている。また大和の國へ嫁いだ姉が離れて暮らしている。父、母、兄、姉、兄嫁、姉婿が豊雄の家族構成である。豊雄は大宅家の末っ子なので七人の家族の中で一番年下だと推測する。「家豊に暮しける」ことから裕福な家柄である。そのうえ大宅家は三輪が崎一帯の里長も務めている。では、父母、兄、姉、兄嫁それぞれの人

物像や豊雄との関係を考察していき、その中での豊雄の位置づけを考えていきたい。

まず父親の大宅竹助は、「太郎どもあまた養ひ、鰯の廣物狭き物を尽してすなどり、家豊に暮し」ているように、大勢の漁師を雇う網元として栄える家の家長である。それは竹助の漁師への指導力や人付き合いの上手さや仕事を怠ることなく務めた結果によって家が豊かになったのである。また大宅家は里長も務めている。このような立派な家の長である父竹助は、人々から頼られており人々を導く存在といえよう。父親の人間性により大宅家が栄えたのだろう。そのような父は、風流なものを好み都に憧れる生活意欲を持たない豊雄の将来を不安に感じている。「家財^{たから}をわがちたりとも即^{やがて}人の物となさん」、「他の家を嗣しめんもはたうたてき事聞（く）らんが病しき」、「只なすまゝに生し立て、博士にもなれかし、法師にもなれかし、命の極は太郎が羈物にてあらせん」と豊雄の将来を真剣に考えており、父親は豊雄へ愛情を注ぐ。しかし豊雄は父親に対して疎遠のようである。眞女子から贈られた太刀を父親に問い詰められても、「此事只今は面俯なり。人傳に申（し）出（で）侍らん」と贈られた太刀の経緯を話さないことから、豊雄にとって父親は遠い存在のようである。

次に豊雄の母親について述べたい。母は作中にあまり登場していない。眞女子から贈られた太刀を兄が見つけ、父親や兄から事情を聞かれる場面で母親が登場する。母は豊雄に「さる物何の料に買（ひ）つるぞ。米も錢も太郎が物なり。吾主が物とて何をか持（ち）たる。日來は爲まゝにおきつるを、かくて太郎に惡まれなば、天地の中に何國に住（む）らん。賢き事をも學びたる者が、などはほどの事わいたためねぞ」と諭す。この母親の発言は封建制度下の家の論理からきている。豊雄が「太郎が羈物」なので「太郎に惡まれなば、天地の中に何國に住（む）らん」と諭しているのである。豊雄と母親の関係について、母は「過活心なかりけり」と生活意欲の低い豊雄に不安を持ちながらも、豊雄の大和國での恐ろしい事件を聞いて憐れむと同時に豊雄の将来を心配し真剣に嫁を迎えるための相談をしている。このことから母親は豊雄に愛情を持ち、気にかけている存在だといえよう。しかし母は物語内にほとんど登場しないことから母親の役割は薄れており、豊雄にとってはほとんど機能しない存在である。

そして兄について考察する。兄は、「質朴^{すなほ}にてよく生産を治む」ように豊雄とは対照的な人物と設定される。純粹で素直な性格は豊雄と共通しているが、非生産的な豊雄に対して兄は働き者として描かれている。「太郎は網子とゝのほるとて、晨て起（き）出（で）るので、大勢の漁師たちを統率する大宅家の働き手である。豊雄が怪しい太刀を持ち帰ったことに

気が付き、豊雄から詳しい事情を聞くのを父親に任せ、「網子どもの怠るらん」と仕事に戻るように、大宅家を守り支える人物である。父親は網元の仕事を兄に任せていることから彼を大宅家の後継者として認めている。父親と兄の仲はたいへん良く順調である。兄が太刀を最初に発見し豊雄を問い詰める行為は、豊雄に世間を教えるきっかけとなったものであろう。豊雄は「生長優しく、常に都風たる事をのみ好（み）て、過活心なかりけり」であるので、世間の常識には疎い人物といえる。中村正市氏が「蛇性の姪」における人間関係の研究^上の中で、豊雄は「身分不相応な太刀を所持していることよりも、許しなき婚約をしたことの方が重大な過失と思い込んでいる」^{注一九}ということからもその点が認識できる。兄が太刀を怪しみ、権現様の奉納品であることに気が付いたおかげで大宅家は救われたうえに、豊雄にとって世間を知るきっかけとなった出来事だと考えられる。

では豊雄と兄の関係はどうであろうか。鵜月洋氏は、『雨月物語評釈』の中で「質朴でしつかり者の兄は、そんな弟の柔弱さを心中にがしく思っていた」^{注二〇}と述べている。さらに中村正市氏は、兄が太刀を持って大宮司に訴え出た行為について「兄は、弟が好きで可愛く思っている訳でもなく、いたく憎んでいる訳でもない。そのような愛情を超越したところの、兄としての責務や使命に基づいて、家の存続のために懸命であったという感を強く受ける」^{注二一}と指摘している。兄は豊雄に心の底では愛情を注ぎつつも、家を守ることが大切だとみなされた社会で、非生産的な彼を厄介者と感じていたのだろう。一方豊雄も兄に対して父親と同様に遠い存在のようである。二人は疎遠な関係だと考えられる。

姉は大和國石榴市の田邊金忠という商人の家に嫁いでいる。「豊雄が訪らひ来るを喜び、かつ月ごろの事どもをいとほしがりて、「いつくまでもこゝに住め」とて、念比に勞りけり」という豊雄を可愛がる女性である。姉と豊雄は仲が良く、豊雄が出獄した時「かくて世にたち接らんも面俯なり。姉の大和におはすを訪らひて、しばし彼所に住ん」と親兄に願ひ出る。一般的に「世にたち接らんも面俯なり」という状態ならば、誰も知らない場所へ行き休養しようとするが、豊雄は姉が暮らす場所へ行きたいと望むので姉を信頼しているといえる。また姉も喜んで豊雄を迎えるので可愛がっている。姉と豊雄はお互い理解し合い、気楽に何でも話すことができる関係なのかもしれない。豊雄が石榴市へ行くことは、姉が一人で決めたのではなく夫金忠の同意を得てのことである。金忠も豊雄を可愛がり快く迎えている。たいていは断わると考えられるが快く迎える金忠は人間性が優れた人物である。また豊雄が願ひ出た時、親兄は反対せず「ゆきて月ごろを過せ」と付き添いを連れて石榴市へ送り出す。親兄は姉のみならず姉婿も信頼しているのだろう。よって姉と

豊雄の関係は、姉は弟豊雄を可愛がり弟豊雄は姉を頼るという、たいへん仲の良い関係であると考察できる。豊雄にとって姉は父親などよりも近い存在である。姉は他家へ嫁ぎ大宅家の家の論理から離れているため自由に豊雄を可愛がることができるのだろう。彼女は大宅家の家の論理に縛られていない人物である。

そして兄嫁を考察していく。兄嫁は、豊雄が太刀について親兄に問い詰められ、「此事愚なりとも聞（き）侍らん」と事情を聞き、豊雄と父親の仲介役を務めている。豊雄は兄嫁に親しみをもち血の繋がった姉のように頼っている。兄嫁に「兄の見咎め給はずとも、密に姉君をかたらひてんと思ひ設けつるに」と言い、かつ「姉君よく憐み給へ」と甘える。兄嫁を信頼し、自分の立場を理解してくれる存在だと信じている。それに対して兄嫁も「男子のひとり寝し給ふが、兼（ね）ていとをしかりつるに、いとよき事ぞ。愚也ともよくいひとり侍らん」と豊雄の立場を充分理解し同情している。兄嫁が父親と豊雄の間に入り豊雄に事情を聞く行動は、それぞれの気を静めて冷静にさせ、問題を円滑に解決できるようにする意図がみられる。それは家の存続を一番に考える家の論理からきているだろう。兄嫁と豊雄の関係とは、兄嫁は豊雄の立場を理解して彼に協力的である。豊雄も兄嫁のことを親しみ信頼している。豊雄は兄嫁を石榴市で暮らす姉の代理と思って接している。

以上のように、家族全員は豊雄のことを心の底では愛情を注ぎながらも、父、母、兄は、家の論理を最優先に考えているため、家の存続のために働かない豊雄を余計者と考えているといえよう。豊雄が太刀を盗み捕えられ牢に入れられた時に、父や兄は「大宅の父子多くの物を賄して罪を贖によりて」と行動を起こしたが、それも家のために行なったことである。父と兄は豊雄を非生産的で家のために働かない余計者で疎ましく思う存在だろう。逆に豊雄は父や兄を、近寄り難い疎遠な人物だと考えている。そのうえ母も家の論理に縛られている存在なので豊雄を厄介者と考えており、豊雄も母を疎遠な人物と考えている。母は豊雄に母性を表すような母親の機能を發揮していない存在である。しかし、姉や兄嫁との関係は良好である。姉や兄嫁は豊雄を可愛がり、豊雄も姉や兄嫁を頼っている。豊雄は姉をほとんど機能していない母親の代理として頼り、兄嫁を石榴市に暮らす姉の代理として頼る。逆に姉や兄嫁は、素直で純粋な豊雄は母性をそその存在のため快く受け入れているのである。豊雄は、男性には疎ましい厄介者の存在と考えられ、母を除く女性には、母性をそその愛らしい存在と考えられている。

「蛇性の姪」は、父、母、兄、姉、兄嫁、姉婿という家族構成であるが、原典「白娘子永鎮雷峯塔」の男主人公・許宣は、両親を亡くし、叔父が営む薬屋で番頭として働き、姉

夫婦の家で暮らしている。家族構成は、姉、姉婿（義兄）、叔父と設定されている。「蛇性の姪」と原典「白娘子永鎮雷峯塔」のどちらも姉夫婦が登場しているが、原典の継承といった夫婦のように描かれているわけではない。勝倉壽一氏は『雨月物語構想論』の中で登場人物について、「原典とは肌合いは違っている^{注三}、封建社会の庶民世界に常に見られるような人物達が描かれてはいる」と指摘されている。したがって秋成は、原典の内容を多く取り入れているとしながらも、家族構成においては原典よりも当時の社会を反映して描いていると考察できる。

第四節 豊雄を救う三人の人物

一、豊雄を救う三人の人物

「蛇性の姪」では豊雄を救う三人の人物が登場する。当麻の酒人、鞍馬寺の僧、道成寺の法海和尚である。それぞれの役割について、当麻の酒人は、吉野での花見見物において、眞女子の正体を見破り豊雄に実心や丈夫心を起こさせようと忠告する人物であり、なおかつ二人の運命を変える人物でもある。鞍馬寺の僧は、眞女子を退治しようと迎えられ、「法師嘲わらひて、「老（い）たるも童も必（ず）そこにおはせ、此蛇只今捉て見せ奉らん」と述べていたが、大蛇の毒気にあたり命を失ってしまう。原典「白娘子永鎮雷峯塔」の中には、戴先生という人物が登場する。彼は亡くならないが、鞍馬寺の僧と同様に蛇の返り討ちに遭ってしまうのである。そして法海和尚は、眞女子を白蛇に戻し鉄鉢の中に入れ、それを土の中に埋めて「永劫があひだ世に出ることを戒め」る僧である。これら三人の僧は原典からヒントを得て「蛇性の姪」に登場しただけでなく、秋成は何らかの意味を持って設定しているはずである。以下にそれぞれの僧を秋成が創作した意味について考察していきたい。

A 当麻の酒人

まず当麻の酒人の「当麻」は、古代大和期から見られる古い地名である。当麻は古代豪族の当麻氏の本拠地とされる。大和国の古い地名ならば、秋成が作品を創造するうえでこの地名を知り、取り入れた可能性はある。『雨月物語評釈』には以下のように指摘している。

当麻氏は用明天皇から出て、大和北葛城郡当麻郷（当麻村）を本拠とした一族で

あり、『新撰姓氏録』にも見えている。秋成はこの辺からヒントを得たのであろうか。^{注二三}

秋成は「蛇性の姪」を創作するにあたりさまざまな作品の要素を物語に取り入れている。原典だけでなく、道成寺伝承、『源氏物語』、『万葉集』などがあげられる。それらの中の一つに『新撰姓氏録』も取り入れられたといえる。秋成が當麻の酒人を創造した意味の一つに『新撰姓氏録』からヒントを得たと考えられる。

しかし単に『新撰姓氏録』からヒントを得て創作しただけでない。當麻の酒人の存在は、豊雄にとっては救世主だが眞女子にとっては敵である。すなわち眞女子と敵対した存在である。当麻は奈良盆地の南西部の二上山東麓の地名で、二上山は奈良県と大阪府にまたがる山である。北峰を雄岳、南峰を雌岳といわれた二峰からなる山で、古代の人々はこの二峰を男女の二神にみたてて二神山とも呼んでいた。この二上山の位置は三輪山と相對する位置にある。三輪山は三輪山伝承のように蛇神伝承と関係が深い山である。三輪山と二上山の位置が対称的にあることから、眞女子Ⅱ蛇と當麻の酒人の関係も相對する構成としたのではないか。眞女子にとって當麻の酒人は本来の姿に戻らざるを得ない存在の人物であり敵である。當麻の酒人の登場により物語は大きく変わっていく。吉野の事件から豊雄は「此年月畜に魅はされしは己が心の正しからぬなりし。親兄の孝をもなさで、君が家の羈^{つかへ}ならんは由・なし」と言い、芝の里へ移り富子と結婚する。一方、眞女子は當麻の酒人から逃げた後、豊雄を追い芝の里へ移動する。そして富子に乗り移り豊雄の前へ現れることから、蛇の持つ執念深い特徴を示してしまうのである。あるいは當麻の酒人の登場により、異類と契りを交わすという人獣婚を犯したことを豊雄が知る時点で二人の愛が破綻を迎えることを暗示させている。そのように考えていくと、やはり三輪山と二上山の場所が相對する点と関連して、眞女子と當麻の酒人の二人の人物も相對する、言い換えるならば敵對する構造としたのだろう。それに伴い秋成は當麻の酒人という人物を創造したと考えられるのである。

B 鞍馬寺の僧

鞍馬寺の僧が創作された意図について、第一に、道成寺伝承の要素が取り入れられた説があげられる。『元亨釋書』巻第十九の中に「釋安珍居^{注三四}二鞍馬寺」^一とあるように、安珍が鞍馬寺の僧という設定を参考にして鞍馬寺を登場させたと考えられる。第二に鞍馬寺と蛇の関係に注目して考察したい。すでに述べたように、説經淨瑠璃『小栗』には、鞍馬寺と蛇が登場する。主人公・小栗は鞍馬寺の毘沙門天の申し子として生まれる。七歳の頃から

学問を学び寺一番の賢い人物であった。十八歳の頃から両親は小栗に妻を迎えさせようとした。だが小栗はことごとく両親のすすめる女性を嫌う。ある日、深泥池の大蛇と契つてしまい、罪を犯した小栗は常陸国へ流されてしまうのである。『小栗』の説話はこれ以降も続くが、着目点に大蛇が小栗に一目惚れし、十六・七歳の美しい姫に変身して鞍馬寺で小栗と契る点があげられる。大蛇が容姿端麗な男に好意を持ち、男に近づこうと美女に変身する。それは「蛇性の姪」の豊雄を愛する眞女子の設定と同様である。鞍馬寺の申し子の小栗と鞍馬寺で大蛇が契りを交わすことは鞍馬寺と蛇の関係を連想させる。秋成は説経浄瑠璃『小栗』から鞍馬寺の僧と蛇を「蛇性の姪」に登場させたのかもしれない。第三に、毎年鞍馬寺では竹伐り会式という行事が開催される。古代、護摩の行いをしていた峯延上人の前に、大蛇が現れ上人に襲いかかり、上人は真言を唱えてこの大蛇を調伏させた出来事に因んで竹伐り会式が始まったといわれている。竹を蛇に見立てて切り勝負を競うのである。つまり蛇は鞍馬寺と関係があるため、鞍馬寺の僧が創造される要素とされたと推察できる。

秋成が鞍馬寺の僧を創造した意図をいくつか考察したのだが、「蛇性の姪」に登場する鞍馬寺の僧は、蛇の毒気に遭い亡くなる。なぜ返り討ちに遭う設定としたのか、その意味を考えてみたい。その理由は眞女子の豊雄への想いが強かったためではないだろうか。想いは豊雄への愛情や執着心を指す。豊雄をどうしても自分のものにしたい願望が、鞍馬寺の僧を返り討ちに遭わせたのである。それだけでなく、蛇の強さを示すためでもあるだろう。読者は『小栗』や竹伐り会式などから鞍馬寺と蛇の関係を連想することができ、蛇に慣れている鞍馬寺の僧でさえも、毒気に遭い亡くなってしまいう設定から、いかに眞女子に蛇が強いのかを示す意図を持って秋成は鞍馬寺の僧を創造したのである。

C 法海和尚

秋成は「蛇性の姪」に道成寺伝承の要素を取り入れていることから、道成寺という寺が選ばれたといえる。一方、法海和尚は原典「白娘子永鎮雷峯塔」から取り入れたのである。「白娘子永鎮雷峯塔」には、法海禪師という名で登場し、許宣を救い、白夫人を白蛇に戻し鉢に入れ、塔の中に閉じ込める役割を持つ僧として登場する。「蛇性の姪」も同様に法海和尚と名前が同じであり、豊雄を救い眞女子を閉じ込める役割も同じなので秋成は原典をそのまま取り入れたと考えられる。

二、「蛇性の姪」の結末部

「蛇性の姪」の結末は、豊雄は生き延び、「命恙なしとなんかたりつたへける」のように、その後は平穩に暮らす終わりとなっている。一方、眞女子は法海和尚により白蛇の姿に戻り、鉄鉢の中に入れられ土の中に埋められる。この結末はイザナミ命伝承や道成寺伝承のように男女の別れ（分離）によって終わる。原典「白娘子永鎮雷峯塔」の結末も、許宣は生き延び白夫人は鉢の中に入れられ塔に閉じ込められて物語は終わる。だが、眞女子は鉄鉢に入れられ土の中に埋められる結末となっても殺されてはいない。土の中でまだ生きている。眞女子を殺さずに閉じ込めた点は何の意味があるのか。単に原典を継承しただけではないだろう。

眞女子が閉じ込められたことは、読者に何十年もしくは何百年後かに再び地上へ出て同じような事件を起こす可能性を暗示させる。當麻の酒人が眞女子を「年経たる蛇」や「牛と犂みては鱗を生み、馬とあひては龍馬を生」と言うことから、眞女子は何度も繰り返し起こしているとも推察する。

しかしそれでも土の中へ閉じ込めたただけなのは、秋成は眞女子を排除しようと考えていないのだという説が浮かぶ。「蛇性の姪」の主題を考えると、豊雄の人間の成長を描いた説、豊雄の姿から封建制度下の人間の悲劇を描いた説があげられている。秋成は豊雄の人間の成長や封建制度下の人間の悲劇を描きたかったのであるため、眞女子を排除することなく土の中に閉じ込めただけなのだと考えられる。さらに再び地上へ出る暗示の考えから、蛇の死と再生を連想させる。『イメージシンボル事典』では、蛇を「すべての動物の中でもっとも靈的な動物とされ、炎のような性格をもち、おそろしく素早く、毎年生まれ変わり、長寿である」と解釈する。^{注二五}『日本国語大辞典』では、「(比喩的に) 執念深いこと」と解釈している。^{注二六}眞女子は「執ねき」という性格である。蛇の執念深い特徴から創造されたようである。なおかつ、土の中に埋められた眞女子は死と再生の象徴により、いつの日か封印が解けて再び地上へ出るという復活を連想させる意図も、秋成が結末部を創造した意味と考えている。

表③ 「蛇性の姪」と「白娘子永鎮雷峯塔」の対照表

〔比較項目〕 ①舞台となる場所 ②男の家族構成 ③男の設定 ④女の設定 ⑤侍女の設定 ⑥二人の出会い ⑦男の見る夢 ⑧女の家を訪れる場面 ⑨求愛方法 ⑩男が捕えられる経緯 ⑪役人と女の家へ行く場面 ⑫女の正体 ⑬侍女の正体 ⑭女の正体を知る動機 ⑮協力する人物 ⑯男を助ける僧 ⑰二人の最期 ⑱後日譚

	「蛇性の姪」	「白娘子永鎮雷峯塔」
①	三輪が崎（紀伊国）	臨安府（杭州）
②	豊雄 独身	許宣 独身
③	父、母、兄、姉、兄嫁、妹婿	姉夫婦、叔父
④	眞女子 寡婦	白夫人（名前ナシ） 寡婦
⑤	まろや	青青
⑥	・雨の日 ・男が傘を貸す ・雨宿りをする ・男が女の美しさに惹かれる	・雨の日 ・男が傘を貸す ・舟に白夫人が乗ってくる ・男が女の美しさに惹かれる
⑦	女と契りを交わす	女と契りを交わす
⑧	誰も女のことを知らない	誰も女のことを知らない
⑨	女から男へと求愛する	女から男へと求愛する
⑩	太郎が、太刀が権現様の奉納品であることに気付き出頭する	A 義兄が、白銀は邵太尉の金庫から盗まれた物であることに気付き出頭する B 役人は、男の身なりが盗まれたものだと言いつき捕える ↓二度捕まる
⑪	女は姿を消す	女は姿を消す
⑫	大白蛇	大白蛇
⑬	小蛇	青い魚
⑭	當麻の酒人によって告げられる	法海禪師によって告げられる
⑮	芝の庄司	李募事（男の義兄）
⑯	A 當麻の酒人 B 鞍馬寺の僧 C 法海和尚	A 戴先生 B 法海禪師
⑰	男は生き延び、女は鉄鉢の中に入れられ、土の中に埋められる ↓二人は別れる	男は生き延び、女は鉢の中に入れ、塔の中に閉じ込められる ↓二人は別れる
⑱	命恙なしとなんかたりつたへける	出家する

- 注一 鵜月洋『雨月物語評釈』 角川書店 昭和四四年三月一〇日 五六四頁
- 注二 田中憲二「雨月物語」論―豊雄の人物設定― 野州國文學 第六三号
- 國學院大學栃木短期大學國文學會 平成一一年三月一五日 四〇頁
- 注三 原典「白娘子永鎮雷峯塔」のテキストは以下のものを用いた。
- 中村博保・雷定平『『警世通言』「白娘子永鎮雷峯塔」試訳(一)』
- 静岡大学教育学部研究報告 人文・社会科学篇 第三七号 静岡大学教育学部
- 昭和六二年六月
- 中村博保・雷定平『『警世通言』「白娘子永鎮雷峯塔」試訳(二)』
- 静岡大学教育学部研究報告 人文・社会科学篇 第三八号 静岡大学教育学部
- 昭和六三年三月
- 注四 先掲 鵜月洋『雨月物語評釈』 角川書店 五六四―五六五頁
- 注五 勝倉壽一『雨月物語構想論』 教育出版センター 昭和五二年九月一〇日
- 二九一頁
- 注六 前掲 勝倉壽一『雨月物語構想論』 教育出版センター 二九一頁
- 注七 中村幸彦 校注
- 『上田秋成集 日本古典文学大系 56』 岩波書店 昭和三四年七月六日 六〇頁
- 注八 前掲 中村幸彦 校注 『上田秋成集 日本古典文学大系 56』 岩波書店 八七頁
- 注九 先掲 勝倉壽一『雨月物語構想論』 教育出版センター 二九一頁
- 注一〇 先掲 鵜月洋『雨月物語評釈』 角川書店 五六八頁
- 注一一 松本才和「雨月物語の女性―真女兒・宮木・磯良―」 香椎潟 第三六号
- 福岡女子大学国文学会 平成二年一〇月二五日 六五頁
- 注一二 阿部真司『蛇神伝承論序説』 新泉社 一九八六年九月三〇日 一六四頁
- 注一三 前掲 阿部真司『蛇神伝承論序説』 九四―九五頁
- 注一四 前掲 阿部真司『蛇神伝承論序説』 九五頁
- 注一五 福田アジオ 新谷尚紀 湯川洋司 神田より子 中込睦子 渡邊欣雄 編
- 『日本民俗大辞典 下』 吉川弘文館 二〇〇〇年四月二〇日 六〇四頁
- 注一六 先掲 阿部真司『蛇神伝承論序説』 新泉社 一七〇頁
- 注一七 先掲 鵜月洋『雨月物語評釈』 角川書店 五六九頁
- 注一八 前掲 鵜月洋『雨月物語評釈』 角川書店 五六八頁
- 注一九 中村正市「蛇性の姪」における人間関係の研究(上) 尚綱大学研究紀要 第七号

尚綱学園尚綱大学 昭和五九年三月一五日 四六頁

注二〇 先掲 鵜月洋『雨月物語評釈』 角川書店 五六四頁

注二一 中村正市「蛇性の姪」における人間関係の研究(中) 尚綱大学研究紀要 第八号

尚綱学園尚綱大学 昭和六〇年二月二五日 三〇頁

注二二 先掲 勝倉壽一『雨月物語構想論』 教育出版センター 二九三頁

注二三 先掲 鵜月洋『雨月物語評釈』 角川書店 五三五頁

注二四 市島謙吉『燕石十種』 図書刊行会 明治四十一年一月三〇日 四五三頁

注二五 山下主一郎『イメージシンボル事典』 大修館書店 一九八四年三月一日

五六二頁

注二六 日本国語大辞典第二版編集委員会 小学館国語辞典編集部 編

『日本国語大辞典 第二版 第十二巻』 小学館 二〇〇一年十二月二〇日

一二六九頁

第三章 「蛇性の姪」における場の問題

第一節 物語の発端 紀の國三輪が崎

「蛇性の姪」の中で豊雄が移動する場所は、三輪が崎・石榴市・泊瀬・吉野・芝の里である。主に紀の國と大和國が舞台に設定されている。その中でも三輪が崎は物語の出発点である。では、なぜ秋成は物語の出発点に紀の國三輪が崎を設定したのであろうか。秋成はどのような意図を持って構想したのであろうかという点を踏まえて、三輪が崎の考察を行っていきたい。さらに紀の國及び紀の國と三輪が崎を含めた熊野一帯が物語の中で持つ意味を考察してみたい。なお秋成は『雨月物語』が刊行される以前に紀の國へ行った跡が見られない。秋成は文献などで紀の國の知識を得たのだろう。

一、三輪が崎の考察

三輪が崎は物語の出発点となる場所である。冒頭に「いつの時代なりけん、紀の國三輪が崎に、大宅の竹助といふ人在（り）けり」と設定されている。男主人公・豊雄は三輪が崎で漁師の網元の末っ子であり、大宅家はこの地一帯の里長をしている。豊雄が三輪が崎を住まいとし、当地を物語の出発地にした意図は何であろうか。

はじめに、三輪が崎について『角川日本地名大辞典』では、「当地は神邑との関係が深く神邑を「みわのむら」と呼んだことによるともいい、神之崎・神前を「みわさき」と呼ぶことにちなむ^{注一}と説明している。古代には神の崎、中世では箕輪崎、近世では三輪崎村と呼ばれていた。神の崎と書き「みわさき」と読むことから三輪が崎は神と関係がある地だと考えられよう。『万葉集』には三輪が崎を舞台とした和歌が一首詠まれている。『万葉集』巻第三 二六五の長忌寸奥麻呂の作の歌である。『万葉集』の中で三輪が崎について詠まれた和歌はこの一首だけだと考えられている。

二六五 苦毛 零來雨可 苦しくも ふり來る雨か

神之崎 狭野之渡尔 三輪の崎 佐野の渡に

家裳不有國 家もあらなくに^{注二}

和歌の意味は、苦しくも降ってくる雨よ、三輪の崎の佐野の渡しに家がないものを、と解釈できる。さらに巻第三以外に『万葉集』巻第七にも「三輪が崎」という場所が詠まれている。『万葉集』巻第七 一二二六の歌であり作者不詳とされる。『万葉集』巻第七 一

二二六「三輪の崎 荒磯も見えず 浪立ちぬ 何處^{いづく}ゆ行かむ 避道^{よきぢ}は無しに」^{注三}である。三輪の崎を「神前」と表す。三輪が崎は新宮市南部の海岸沿いに位置し、現在でも漁業が盛んな地といわれる。そのためこの和歌も「荒磯」や「浪」の表現から新宮市の三輪が崎を指すと考えられよう。しかし、澤瀉久孝氏は「波の荒い崎をさう云つたところはいくらもあるからどこと定め難い」^{注四}と考えられている。同じく『日本古典文学大系』には「新宮市三輪崎の地か。カミノサキとも訓めるが、それならば場所は未詳」^{注五}としている。前述したように、和歌の舞台は三輪が崎と考えられつつも三輪が崎ではないと判断する考えが諸説存在する。つまり確かに三輪が崎を舞台とした和歌は『万葉集』巻第三 二六五の一首のみといえよう。

ところでこの和歌は作中に、豊雄が眞女子と出会い、豊雄が積極的に眞女子にアプローチする場面で詠まれる。容姿端麗な都会の高貴な侍まいをした眞女子に心惹かれ、豊雄が知的であり風流めいていることを彼女に見せようと、昔の人が詠んだものとして、「くるしくもふりくる雨か三輪が崎佐野のわたりに家もあらなくに」と詠む。意味も「困ったことに降って来た雨だ。三輪が崎の佐野の辺には、一軒の家もないのに」^{注六}と解釈されている。秋成は『万葉集』巻第三 二六五の和歌をそのまま物語に取り入れている。解釈にあるように、「雨」と「三輪の崎」から、作中の二人の出会いが雨である点や出会いの地が三輪が崎という点と関係して、この和歌がそのまま作品に取り入れられたのである。

では『万葉集』巻第三 二六五の考察に戻りたい。三輪の崎を「神之埼」と表す点に注目していくと「神」をミワと読んでいる。ならば神の崎Ⅱ三輪の崎と連想できるうえ、かつ、神Ⅱ三輪と推察できるだろう。つまり三輪が崎は神を連想させる地とみなされる。また当地は「三つ山詣せし次に、海愛らしくこゝに遊ぶらん」とあるように熊野三山に近く、地形の面から考えて熊野一帯が三輪が崎を配下に収めている。三つ山は本宮・新宮・那智を示す。熊野については後で考察するのだが、一説に熊野は境界の地域といわれる。三輪が崎を含めた地域を熊野一帯と考えるならば、三輪が崎も境界の地とみなすことができる。

また三輪が崎は古くからその地名が登場する。『日本書紀』神武天皇の条で、天皇や軍隊は熊野へ到着したが暴風雨に遭遇する。それにより稲飯命^{いなひのみこと}と三毛入野命^{みけいりののみこと}を失う。さらに天皇は軍勢を率いて先に進むのだが、悪神が現れ毒気を吐き、皆気を失った。この時熊野の高倉下^{たかくらじ}という者が現れ天皇へ霊剣を献上する。たちまち天皇や兵士たちは正氣に戻り危機を免れる物語である。三輪が崎は「遂に狭野を越え、而して熊野の神邑に到り、且天磐盾に登り、仍りて軍を引き漸くに進む」^{注七}という箇所が登場する。「熊野の神邑」は「神邑」

から三輪を連想させ、また熊野との位置関係から三輪が崎を指すと考えられよう。さらにこれ以降以下のように物語は続いていく。

海中にして卒に暴風に遇ひ、皇舟漂蕩ふ。(中略)三毛入野命、亦恨みて曰はく、「我が母と姨とは、並びに是海神なり。何為ぞ波瀾を起て灌溺れしむる」とのたまひ、則ち浪秀を蹈みて常世郷に往でましぬ。天皇独り、皇子手研耳命と軍を帥めて進み、熊野の荒坂津に至ります。(中略)時に神、毒気を吐き、人物咸に瘵えぬ。^{注八}

海上で暴風に遭遇し悪神が毒気を吐いたため、皆が気を失ったことについて記述されている。対して『古事記』では、「故、神倭伊波礼毘古命、^{かむやまといはれびこのみこと}其地より廻り幸して、熊野の村に

到りし時に、大きな熊、髣かに出で入りて、即ち失せき」^{注九}の箇所があてはまる。『古事記』では、神の化身とされる大きな熊が現れてその毒気に当てられ、皆気を失い倒れる様子が描かれている。ここでは『日本書紀』の中に、三毛入野命が「我が母と姨とは、並びに海神なり」と述べた点に注目したい。母とは玉依姫を、姨とは豊玉姫を指す。^{注一〇}どちらも海神

であり蛇身とみなされる。豊玉毘売は八尋ワニの本身を持つ毘売で蛇神である。玉依毘売は豊玉毘売の妹であり、豊玉毘売が八尋ワニならば玉依毘売も八尋ワニの本身を持つ蛇身と連想する。この点から蛇身Ⅱ異類の構造が浮かぶ。眞女子も、蛇身Ⅱ異類Ⅱ海神と推察できるだろう。眞女子は海の神の側面を持つものかもしれない。蛇は水神の役割があるため水神から海神へと連想するには難しくない。そのうえ『日本書紀』での「時に神、毒気を吐き」という記述は、「蛇性の姪」での鞍馬寺の僧が眞女子Ⅱ蛇に毒気をかけられ命を落とす描写と似ていると考えられる。『日本書紀』では悪神が毒気を吐いて皆が気を失うだけだが、「蛇性の姪」では、眞女子Ⅱ邪神^{あしきかみ}が毒気を吐いて鞍馬寺の僧が死に至る。よって秋成が『日本書紀』神武天皇の条を作品を創造するうえで参考にした可能性は高いだろう。

それだけでなく、「蛇性の姪」で眞女子が豊雄へ太刀を贈る場面は、熊野の高倉下が現れ靈剣を天皇に献上する場面から取り入れたと推察する。天照大神の指示で武甕雷神が夢の中で高倉下に靈剣を天皇に献上せよと指示した。高倉下は指示に従い天皇に靈剣を献上すると、天皇や兵士たちが回復する場面である。この場面は剣を天皇へ献上することにより天皇を救う設定となっているが、「蛇性の姪」では太刀を贈ることによって豊雄は危機に陥る設定となっている。逆の設定ではあるが、秋成が、前に述べた出来事を参考にした可能性が考えられるならば、この靈剣を献上する場面も物語の参考にした可能性があるだろう。

そして、秋成が三輪が崎を物語の出発点にした意図として、三輪が崎は物語の中心的な

存在である三輪山伝承を連想させるものとして選ばれたのであろう。三輪山は蛇と関係が深い山である。三輪山伝承については、第三章第四節「三輪山伝承との関係」で詳しく考察するのでここではあまり述べない。要するに、はじめに三輪が崎を物語の出発点と設定し、読者に三輪山伝承を連想させる。その後物語の舞台は、石榴市・泊瀬へと移動し、地理的に蛇身と関係する大和國の三輪山に次第に近づいていく。三輪山伝承は蛇身を想像させ、蛇身Ⅱ異類は二人の愛の破綻を連想させるのである。三輪が崎は、『日本書紀』での海神という考察から眞女子Ⅱ海神と想像されて、眞女子は海や川を移動し三輪が崎へ来たと考えられる。

二、紀の國及び熊野の考察

紀の國は古くは「木国」とも書かれた。山地で雨が多いためたくさんの森林が茂った地形からそう呼ばれた。秋成が紀の國を物語の場所に設定した意図に熊野の地が関係すると考えられる。これらの場所は作中では物語の序盤に、主人公・豊雄の誕生の地である点、豊雄が新宮、詳しくいえば熊野速玉神社の神主の師のもとで学問を学んでいる点、飛鳥の神秀倉の見える漁師の家で眞女子と出会う、出会いの場という点があげられる。そのうえ物語の終盤では、豊雄は紀の國へ帰り芝の里へ移動するという点もあげられる。三輪が崎・紀の國及び熊野一帯は物語の序盤と終盤の舞台と設定されている。以下には紀の國及び紀の國と三輪が崎を含めた熊野一帯を考察していきたい。

まず熊野の地名について述べる。当地の由来は諸説存在する。以下の説が考えられる。

- ①「くま」は神稻くましうなどに通じ“神の意”であるとされ、韓土の俗に熊を神獣としていることから、転じて熊をもちいて神と熊くま両様の意義を持つようになったというのである。注一

- ②出雲地方にも共通する解釈として、熊野とは隠野こもりぬで、死者の隠れるところであり、『万葉集』などにもよく歌われている隠国こもりくと同義だとされている。注二

- ③熊野の「くま」は熊襲くまその「くま」と同じで、その他熊鷹・熊鷹など、いずれも猛く荒ぶる意味だとされているが、これも隠国の解釈と同様、大和を「可美国うましくに」日本とする神話的表現と対比して解釈したものと考えられる。注三

視点を変えて検討すると、「熊は隈であり、山深く、木々が生い茂っているところで、「木間野」の字をあてる解釈もある。また隈を僻陬や未開地とする考え方もある」という説もある。様々な説をあげてきたが②の説を支持したい。地形的に「山深く、木々が生い茂つ

ているところ」から四説目の考え方も納得してしまいそうだが、②の説の「死者の隠れる」という記述から熊野は死者と関係すると推察する。確かに熊野は地理的条件において、「北を果無山脈と大峯山脈に塞がれ、東・西・南を海に囲まれた熊野はたしかに内から見ても外から見ても或る種の隔絶感を感じさせる地」^{注一五}のように、塞がれた籠った地といえる。熊野は山と川に隔てられたゆえに聖地視され、さらには異空間が存在する地と繋がりを広げていった。すなわち、熊野は現世と異界が存在する両義性を持つ場所である。

熊野はイザナミ命が葬られた場所とみなされる。『古事記』では、「出雲国と伯伎国との堺の比婆之山に葬りき」^{注一六}と記述されており、比婆之山は、現在では地名が残っていないため定かでないが、島根県と鳥取県の境の場所と考えられる。一方『日本書紀』では、「紀伊国の熊野の有馬村に葬りまつる」^{注一七}と異なる記述がされている。『日本書紀』でのイザナミ命の死は火の神を生んだ際に火傷をして亡くなられた。熊野の有馬村は、現在の三重県熊野市有馬町周辺で花の窟という岩壁を指すといわれる。だとすれば、古くは紀の國に属していたことになる。岩壁は黄泉国との境界を意味するといわれ、熊野は黄泉国との境界の地と考えられる。そのうえ『角川日本地名大辞典』では、「素戔鳴命が根の国に入るに先立つて足をとめたことから、死霊の国への入口とも考えられていた」^{注一九}と記されている。よって、熊野は黄泉国との境界の地であり死者が籠る場所の入口の意味を持つ地といえよう。イザナミ命が葬られた地を『日本書紀』の説だとすると、熊野は死者を葬る場所と考えられる。これは第三章第三節「隠国の泊瀬」で考察するが、泊瀬も熊野と同じように死者の葬る場所である。また泊瀬は現世と異界を繋ぐ境界の地とも考えられている。熊野が死者を葬る場所ならば、その地には現世と異界の両方が存在しているのではないだろうか。つまり熊野も境界の地だと考えられるのである。

次に作中にも登場する「三つ山詣」を示す熊野三山を考察する。熊野三山は、熊野本宮大社、新宮の熊野速玉大社、熊野那智大社の三社を総称して呼ばれる。熊野本宮大社は山中の深くに位置し「山の熊野」と呼ばれ、熊野速玉大社は熊野川の河口近くに位置し「海の熊野」と呼ばれる。熊野那智大社は熊野灘に面した地に位置し海の熊野といえる。それぞれの祭神は、熊野本宮大社は家津御子大神として素戔鳴命をあて、熊野速玉大社は速玉之男神をあて、熊野那智大社はイザナミ命をあてたことが通説とされる。これら三神に共通する点は、死者の国に關係がある神だということである。素戔鳴命は死霊が住む世界とされる「根の国」へ追われた神であり、速玉之男神は、イザナキ命がイザナミ命の死体にくれた穢れを祓うために唾を吐いたときに化生した神で死者の国の穢れを防止する神とみ

なされる。イザナミ命は火の神を生んだ際に火傷をして亡くなる神とされ、黄泉国の神である。三神が死者と関係する神であるため、熊野が死者の国という説の由来は明らかであろう。

そして熊野は「死と再生」の地である。それは三輪が崎の考察でとりあげた『古事記』神武天皇の条での、熊野村に大きな熊が現れ神武天皇や軍隊を毒気で気絶させる出来事を指す。『古事記』のあらすじを再び述べておくと、神倭伊波礼毘古命かむやまといはればこみことⅡ神武天皇が熊野の村に到着した際、神の化身とされる大きな熊が現れその毒気に当てられ、皆気を失い倒れてしまう。そこへ高倉下が現れ、天つ神御子（神倭伊波礼毘古命）が横たわっている所へ靈剣を献上し、天つ神御子は正氣に戻り、靈剣の威力により危機を免れる物語である。安原眞琴氏は「熊野をめぐる近世文学―「蛇性の姪」と熊野」の中で、天皇が気を失っている描写について「目を覚ましたときの天皇の言葉「長く寝ねづるかも」は、その眠りが〈病〉よりも〈死〉に近いものであったことを暗示している」と述べている。^{注10}死に至っては無いが、生と死を彷徨うような死の直前まで至ったところから正氣に戻ったという、言い換えれば、復活することが描かれている。このことは熊野が死と再生のイメージを持つ地と考えられる要素だといえよう。また、熊野が死と再生（復活）のイメージを持つ地であるならば、死と再生（復活）は蛇を象徴するものといえる。さらに熊野はイザナミ命が葬られた場所であり、イザナミ命は蛇神である。このような要素から少なからず熊野も蛇身と関係する地なのではないかと考えている。

以上のように熊野の地を考察してみた。これらの点から三輪が崎や熊野を含めた紀の国という地は、熊野一帯が表すように、死者の籠る霊界の地であり、同時に、異界を結ぶ境界の地でもあるといえよう。または樹木や森林が生い茂る地形のように、紀の國自体でさえも籠る要素を持ち合わせた場所であると考えられよう。秋成が熊野を含めた紀の國を作品中に設定した意図は、このようなさまざまな要素が基盤になっているのである。

第二節 歌垣の地 石榴市

豊雄は眞女子に婚約の約束として、金銀が飾られた奇妙なまでに輝く太刀を贈られた。しかしその太刀は、熊野権現へ奉納するためのものであった。豊雄はその太刀を盗んだ罪を疑われ、その後豊雄の無実は証明されたが盗品を所持していた罪は免れられず、百日程

牢に入って罪を償った。牢から出た後に豊雄は石榴市へ移動する。大和國の石榴市は姉夫婦が暮らす場所である。豊雄が自ら進んで石榴市へ行くことを希望し、父も反対せずに送り出す。「蛇性の姪」の舞台は、紀の國三輪が崎から大和國石榴市へ移動する。以下に秋成は豊雄が物語の出発地である三輪が崎から移動する場所として、なぜ石榴市を選んだのか。石榴市を物語に取り入れた意図を説明していきたい。ちなみに石榴市は、海石榴市・海柘榴市・椿市・都波岐市と記され、読み方は「つばきいち」から「つばいち」へと変化した。

石榴市は過去の文学作品に登場しており、『蜻蛉日記』には、作者の藤原道綱母が泊瀬へ参詣する時に泊った場所として描かれる。「またの日は椿市といふところにとまる」^{注二}と記述されている。また当地は『枕草子』の中でも以下のように紹介されている。

市は たつの市。さとの市。つば市、やまとにあまたあるなかに、長谷に詣づる人の、かならずそこに泊るは、観音の縁のあるにやと、心ことなり。^{注三}

まず石榴市は泊瀬の門前市として栄えた地であった。長谷寺へ参詣する途中に位置し、参詣する人が必ず当地へ泊ることが想像できる。「市」とは、「人が集って物を売買する所。もとたくさんの道路の意という」^{注三}と解釈し、石榴市も人通りが多い場所とされただけなく、道が入り組んだ交通の要所としても栄えた。

次に石榴市は「歌垣の地」として知られる。歌垣は、『日本国語大辞典』には以下のよう記述されている。

①古代、男女が山や市（いち）などに集まって飲食や舞踊をしたり、掛け合いで歌を歌ったりして性的解放を行なったもの。元来、農耕予祝儀礼の一環で、求婚の場の一つでもあった。^{注四}

また、『日本古典文学大辞典』に「古代、男女が集団で飲食歌舞しつつ、相互に歌い掛け歌い返す行事。本来、生産の予祝行為であり、性の開放を伴っていた」^{注五}とあることから、歌垣とは、男女が集まり飲食をすることや歌を詠み合い交流する場所であり、なおかつ男女の求婚の場であったと考えられる。所謂、男女の出会いの場と解釈する。

『万葉集』巻第十二に石榴市を舞台とした和歌が詠まれている。いずれの和歌も作者不詳となっている。

二九五 一 海石榴市の 八十の衢に 立ち平し 結びし紐を 解かまく惜しも^{注六}

三二〇 一 紫は 灰さすものぞ 海石榴市の 八十の衢に 逢へる子や誰^{注七}

石榴市が万葉集に登場するのはこの二首である。二九五一は歌垣で知り合った男性への想いを述べる歌とみられる。それに対して三二〇一は男から女への問答歌とみられる。「八

十の衢に 逢へる子や誰」の意味は、八十の衢で出逢ったあなたはいったいこの誰ですかと解釈する。男が女の名前を尋ねている。それは男から女への求婚を指すのではないだろうか。石榴市は男女の求婚の場の意味も示すようである。さらにこの二首の中に「八十の衢」という語彙が記されている。澤瀉久孝氏は八十の衢の解釈に、二九五―は「いくつにも道のわかれた辻に」^{注二八}、三二〇―は「四通八達の辻」^{注二九}と解釈しており、石榴市が「道の四方にわかれた繁華街であつた」と推察している。つまり石榴市は男女の求婚の場という点だけでなく、道が四方に別れていたように交通の要所であると同時に、男女の出会いと別れが繰り返された地といえよう。

そのうえ、石榴市が男女の出会いの場＝歌垣の場として最初に登場するのは、『日本書紀』巻第十六武烈天皇の条だろう。「妾、望はくは、海柘榴市の巷に待ち奉るらむ」^{注三〇}という箇所であり、後には「果して期りし所に之きて、歌垣の衆に立たして」^{注三一}と記されている。よって石榴市は古代から歌垣の地として知られており、秋成も「蛇性の姪」を創造するにおいて充分に知り得た事柄であつたと考えられよう。

作中では石榴市は豊雄と眞女子が再会した場所に設定されている。男女の出会いの場を二人の再会の場と考えて設定したと推察する。さらに出会いの場で出会うことにより、石榴市は男女の愛を深める場とも考えられよう。豊雄と眞女子は石榴市で金忠夫婦のもとに婚儀を行い夫婦となる。当地は、男女の出会いの場として名高く、「蛇性の姪」では再会の場と設定しているが、どちらも基本的に男女が会う場所とみなされる。

秋成が当地を選んだ理由の一つに、石榴市が歌垣の地で男女が出会う場であり、愛を深める場と考えられるので、そこから豊雄と眞女子が結婚する場が構想されてこの地が選ばれたのだろう。逆に出会いの場で著名な当地を設定することにより、二人が愛を深め合うことを暗示させる意図があつたとも考えられる。それだけでなく、出会いの場から当地が男女にとって神聖な場所だとみなされたかもしれない。さらに『日本古典文学大辞典』で「歌垣」の起源の中にこのように記されている。

古代の人々の信ずる言霊のはたらきから見ると、言霊の強力な力が相手を打ち負かす、すなわち歌い掛け歌い返して歌い勝つことにより相手を支配し得ることになる。負けた相手は服従しなければならぬ。^{注三二}

これは、「蛇性の姪」の中で、二人が再会した当初豊雄は眞女子を拒絶していたが、眞女子の言葉＝気持ちに姉夫婦が感動し、豊雄も次第に眞女子に心を開いて夫婦となる描写と似ている。眞女子の言霊＝気持ちが豊雄の心を開かせ、すなわち眞女子の願いどおりに

なることを示しているのではないだろうか。最終的に二人の愛は破綻を迎えるが、石榴市での二人が夫婦となる過程と歌垣の事柄は関係すると推察する。つまり石榴市が歌垣の地である要素を作者は石榴市の場面で反映させたのだといえよう。

さらに石榴市は『源氏物語』『玉鬘』の巻にも登場する。豊雄と眞女子の再会とは、「玉鬘」の巻から取り入れられたともいわれている。泊瀬の長谷寺へ参詣しようとする玉鬘が石榴市の宿で右近と再会する場面が描かれている。亡くなった夕顔の遺児・玉鬘と夕顔の乳母子で侍女であった右近との再会である。『源氏物語』『玉鬘』の巻の「初瀬なむ、日本の中にはあらたなる験あらはしたまふと、唐土にだにきこえあむなり」という表現が、「蛇性の姪」には「佛の御中には泊瀬なんあらたなる事を、唐土までも聞えたる」という表現として用いられた。また、「玉鬘」の巻にある「国々より、田舎人多く詣でたり」という表現は、「蛇性の姪」には、「都より邊鄙より詣づる人」という表現で取り入れられている。そして「玉鬘」の巻で玉鬘と右近が再会した後、泊瀬川の前で二人が和歌を詠み交わす描写での右近の「ふたもの杉のたちどをたづねずはふる川のべに君をみましや」の和歌を、^{注三六}「蛇性の姪」では、和歌の中にある「二本の杉」という表現が取り入れられている。豊雄や姉夫婦から誤解を解こうとする眞女子の発言の中に用いたようである。「二本の杉」とは、泊瀬の川辺に立つ杉である。^{注三七}天照大神が天降りした杉と伝えられる。歌などに「愛人と邂逅すること、再会すること」の意味で用いられた。二本の杉は再会の意が連想される。秋成は「玉鬘」の巻にある「二本の杉」から豊雄と眞女子の再会を連想させたのだろう。玉鬘と右近が再会することや二本の杉が立っているのはいずれも泊瀬であるが、秋成はそれらの点を石榴市の場で設定している。それは石榴市の場面で用いることで、当地が二人の再会の場であることを連想させるための秋成の意図であろう。再会の意味から石榴市で「玉鬘」の巻の要素を用いたと考えられる。

このように本文を照らし合わせても、「蛇性の姪」の豊雄と眞女子が石榴市で再会する構想は『源氏物語』『玉鬘』の巻から着想を得て作成されたといえる。よって再会する場所として石榴市を選んだのは、『源氏物語』『玉鬘』の巻に描かれている玉鬘と右近の再会が石榴市であったため、秋成は石榴市を選んだのだと考えられる。秋成は『源氏物語』の要素を再会の描写以外にも物語に取り入れている。例えば、「板敷の間に床疊を設けて、几帳、御厨子の饅、壁代の繪なども、皆古代のよき物にて」という眞女子の家の描写があげられる。字句や文章の上だけに留まらず、王朝的な雰囲気 작품을作品に漂わせている。秋成が石榴市を再会の場とした理由は、歌垣の場である点だけでなく、『源氏物語』『玉鬘』の巻で描

かれている、玉鬘と右近の再会の要素を取り入れたことから創作されたのである。

そして地理的観点からも石榴市が選ばれた意図を推察する。石榴市とされた場所である現在の桜井市は、背後に三輪山がある。三輪山は蛇神（大物主神）と関係する山である。三輪山から石榴市までの距離はあまり離れていない。なおかつ男女の恋愛関係を連想できる場所を秋成が構想したならば、まさしく石榴市こそが物語の舞台に設定されなければならないであろう。

以上のように秋成が石榴市を設定した意図を考えてみた。当地は歌垣の地である点、『源氏物語』から取り入れた点、石榴市の位置から考えられた点をあげたが、石榴市を設定した直接的な意図は、やはり『源氏物語』「玉鬘」の巻に描かれている玉鬘と右近の再会の描写から着想したものといえる。しかしそれだけでなく、秋成が石榴市を選んだ意図に「泊瀬」も関係してくるだろう。石榴市と泊瀬は距離が近いうえ、石榴市は泊瀬の門前市とみなされた。泊瀬の長谷寺へ参詣の際に人々が石榴市を宿駅として利用していたからである。次節では泊瀬について考察していきたい。

第三節 隠国の泊瀬

「蛇性の姪」の中で泊瀬は、豊雄が石榴市へ移動した場面で描かれる。泊瀬は、「此石榴市といふは、泊瀬の寺ちかき所なりき。佛の御中には泊瀬なんあらたなる事を、もろこし唐土までも聞えたる^{とて}、都より邊鄙より詣づる人の、春はことに多かりけり」と描かれている。石榴市は泊瀬の門前市とされ長谷観音に参詣する人々で栄えたようである。本節では作者はなぜ泊瀬という場所を物語の中に取り入れたのかという点を問題点にしたい。石榴市に近い場所だからという単純な考えではない。何らかの意図があるために泊瀬が描かれたのである。当地の場所が作品に深く関わっているといえる。作者の秋成が、泊瀬を作品の場所設定に取り入れた意図を探っていききたい。

泊瀬は長谷寺や長谷観音の地として知られている。前節で述べたように、『枕草子』には、「市は、たつの市。さとの市。つば市、やまとにあまたあるなかに、長谷に詣づる人の、かならずそこに泊まるは、観音の縁のあるにやと心ことなり」^{注三八}と長谷観音が登場し、他にも、『源氏物語』の「玉鬘」の巻で「うち次ぎては、仏の御中には、初瀬なむ、日本の中にはあらたなる験あらはしたまふと唐土にだに聞こえあむなり」^{注三九}と登場している。『蜻蛉日

記』の作者も長谷観音に参詣しており、長谷観音信仰が貴族の間に広まり盛んに長谷詣が行われていたといわれる。^{注四〇}

このようにさまざまな文献に登場する泊瀬は、長谷観音信仰だけでなく泊瀬という場所自体にも何らかの意味を持つために秋成が当地を設定したのだと考えられる。

第一に泊瀬は『万葉集』に登場している。『万葉集』には泊瀬を舞台とした和歌が全部で三十二首詠まれている。当地が初めて登場するのは巻第一 四五の長歌である。柿本人麻呂の作のもので以下のように詠まれている。

四五 やすみしし 我が大君

高照らす 日の皇子

神ながら 神さびせすと

太敷かず 都をおきて

こもりくの 初瀬の山は

眞木立つ 荒山道を

岩が根 さへ樹押しなべ

坂鳥の 朝越えまして

玉かざる 夕さり来れば

み雪ふる 阿騎の大野に

旗すすき しのをおしなべ

草枕 旅宿りせず

いにしへ思ひて^{注四一}

「初瀬の山」には、「こもりくの」という表現がかかる。「こもりくの」は泊瀬の枕詞とされ「隠国乃」^{ゴモリクノ}と表わす。泊瀬は、「山にかこまれてゐるから、隠れる處、隠れる國」^{注四二}の意味と解釈されている。隠国は、『日本国語大辞典』には、「く」は場所、所の意。両側から山が迫って、これに囲まれたような地形であるところから）地名「初瀬」にかかる。

「はつ」に身が果つの意をふくませて、死者を葬る場所の意をこめている例もあるといわれている^{注四三}と記述している。一方、『角川古語大辞典』での隠国とは、「く」は場所を表し、こもる場所の意。四方を山に囲まれた場所の意で、地名、泊瀬にかかるというが、古代には、この地は墓所であり、祖霊のこもる地として恐れられていたらしく^{注四四}とある。ならば泊瀬は、山に囲まれた地形から死者を葬る場所という意味や、「隠国」という語から祖霊の籠る地と考えられていたようである。死者＝霊と泊瀬について詠んだ和歌に以下の二

首があげられる。

四二八 こもりくの 泊瀬の山の

山の際に いさよふ雲は

妹にかもあらむ 注四五

一四〇八 たは言か およづれ言か

こもりくの 泊瀬の山に

廬せりといふ 注四六

まず『万葉集』巻第三 四二八は柿本人麻呂の作のものであり、泊瀬の山と山の間に漂っている雲は愛しい妹だろうかという解釈が考えられる。山に漂う雲を火葬の煙とみなし、それを妹かと連想させている。雲Ⅱ火葬の煙Ⅱ亡くなった妹と考える。妹はすでに亡くなり、それが泊瀬の山と山の間に見える雲に連想させることから、隠国の泊瀬は、死者や霊の籠る場所と裏付けられるだろう。次の巻第七 一四〇八の和歌も同様に考えられる。「廬せりといふ」の解釈を澤瀉久孝氏は、訓釋に、「死んで葬られてゐるのを廬をしてゐると人がいふ」注四七と説明している。泊瀬の山は死者を葬る場所とみなされていたと想像できる。それは泊瀬の山だけでなく、当地一帯が死者と関係する籠る地帯だといえる。

このように考えてきたが、泊瀬は死者の葬られる場所や祖霊が籠る場所であると同時に現世と異界を繋ぐ境界の地ではないかと考えられる。泊瀬の位置は石榴市の位置と同様に、蛇神と関係のある三輪山を背後に抱えている。作者は、作品の構想上、蛇Ⅱ異類が出現する場所を必要とするために現世と異界との境界の地である泊瀬を設定したと推測される。また泊瀬は籠る地といわれることから、このことも蛇と深い関係があり、かつ籠ることにより復活や再生の意味を持つ場所であると考えられる。蛇と関係があるとする意図は、泊瀬の背後に蛇と関係している三輪山が位置している点と、道成寺伝承の女から蛇へ変身する変身過程において、女が籠った後に蛇に変身する「籠り型」から考察できるだろう。一方、復活や再生の意味を持つ場所という意図は、蛇のように籠ることにより復活や再生する意味を連想できる点から推察する。『万葉集』巻第十六 三八〇六の和歌には泊瀬と籠る意味が関連している。

三八〇六 事しあらば 小泊瀬山の

石城にも 隠らば共に

な思ひ吾が背 注四八

この和歌は、事が起こり小泊瀬山の石城に籠るならば共に籠りましょう、我が背よ、と

解釈されている。この歌の石城は墳墓の意と解され、泊瀬は墳墓の地を意味する。西郷信綱氏の『古代人と夢』の中にはこの歌の解釈として、「こもらば共に」の一句に復活の觀念が揺影している」^{注四九}とし、また「こもる」とは、「つまりコモルのは生れ変わるため」^{注五〇}と解釈がなされている。「こもる」は復活や再生の意味が込められており、「隠国」も復活や再生の意味が含まれるだろう。その意味は泊瀬一帯を示す。したがって泊瀬は死者を葬る場所というだけではなく異界との境界の地であり、そして復活や再生をする地という点から蛇と関係のある場所だと考察できる。すなわち泊瀬は異類が籠り変身するために必要な地であつたのだろう。

そして泊瀬は水と関係する場所であると考察する。泊瀬には泊瀬川が流れているので水と関係があるといえるのだが、『万葉集』巻第十三 三二六三をとりあげてみる。

三二六三 こもりくの 泊瀬の河の

上つ瀬に 齋杙を打ち

下つ瀬に 眞杙を打ち

齋杙には 鏡を掛け

眞杙には 眞玉を打ち

眞玉なす 我が思ふ妹も

鏡なす 我が思ふ妹も

ありと云はばこそ 國にも

家にも行かめ 誰故か行かむ^{注五一}

「齋」は齋み浄める意味を持つ。浄めるのはそこに水神など尊いものが存在することを表しているだろう。西郷氏によればこの歌から「初瀬が水の神の霊場であつたらしいさまがうかがえる」^{注五二}と考えている。また長谷寺の奥には滝蔵社というものが祀られており、滝自体が神体となる社で長谷寺の地主神だと推測されている。なので泊瀬川が水神の霊場であつたといえる。そのことから「隠国乃泊瀬」は、「籠り奥まつた初瀬の景觀に帰するだけでは皮相で、神話的にはそれは豊饒たる母胎を意味した」^{注五三}地だといえるのではないか。つまり泊瀬は母性の特徴を持つ場所である。それは眞女子の地母神の役割を持つとも考えられる。眞女子は豊雄を純粹に愛する面と、豊雄を我がものに彼を支配しようとする相対する面を持つ。河合隼雄氏は「母性はその根源において、死と生の両面性をもっている。つまり、産み育てる肯定的な面と、すべてを呑みこんで死に到らしめる否定的な面をもつ」^{注五四}と述べている。眞女子の純粹に豊雄を愛する肯定的な性格と豊雄をどこまでも追いかける

執念深い否定的な性格は彼女の母性を示すだろう。ゆえに眞女子は当地において自由に移動することができたのかもしれない。

要するに作者が「蛇性の姪」を構想するうえで泊瀬を取り入れた意図は、「隠国」という山に囲まれた籠った地形から、死者が籠る場所で境界の地であるとする考えだけではない。泊瀬と三輪山は距離的に近く、これらの地帯は蛇神と関係する地帯と考えられたのかもしれない。だとすると眞女子は豊雄を追うために自由に行動できるだろう。泊瀬が水神の霊場ならば眞女子Ⅱ蛇Ⅱ水神と連想でき、眞女子にとって移動が可能だったのである。秋成は豊雄と眞女子が再会する地を石榴市・泊瀬としたのは、男女の出会いの場で知られる石榴市を取り入れただけでなく、泊瀬が蛇とつながりのある地という点に重点を置いて作品の中に登場させたといえよう。石榴市で豊雄と眞女子が再会したのは、泊瀬の場所であつたからこそ眞女子の力を発揮できたのだと考えられる。

第四節 三輪山伝承との関係

「蛇性の姪」には様々な場所が設定されている。紀の國三輪が崎、大和國石榴市、泊瀬、吉野、芝の里である。三輪山は物語に直接的に登場しているわけではないが、蛇と関係が深い山である。眞女子Ⅱ蛇と関係している山だといえよう。三輪山を背後に置き石榴市や泊瀬の地がある。秋成が作品を構想し場所を設定していくうえで、三輪山または三輪山伝承は中心となる場所ではないかと考えられている。以下に三輪山を考察していきたい。

まず三輪山は『万葉集』に二十九首登場している。三輪山が最初に登場するのは、『万葉集』巻第一 一七の額田王の作である。

一七 味酒 うまけ 三輪の山

青丹よし 奈良の山の

山のまに い隠るまで

道のくま い積るまでに

つばらにも 見つゝ行かむを

しばしばも 見さけむ山を

心なく 雲の 隠さふべしや 注五五

澤瀉久孝氏は和歌の解釈を、「美しい三輪の山、あの山が奈良の山の山の間にかくれる

まで、長い道の幾曲りを重ねるまで、しみじみとふりかへり見ながら行かうものを、幾度も幾度もふりさけて眺めやらうと思ふ山であるに、その山を、無情にも、雲がさへぎりかくすといふ事があるべきか」^{注五六}と解釈している。味酒は三輪の枕詞とされ、三輪山は端麗な美しい山と表現されている。この山は四六七メートルの標高があり、盆地側から見た時に端正な円錐形をしているという。三輪山について『古事記』では、御諸山・美和山^{みもろ}という名称でも記されており、対して『日本書紀』では、三諸山という名称でも記されている。『古事記』の中に三輪山という名についての山の起源を述べた伝承が記されている。いわゆる三輪山伝承（阿部真司氏の『蛇神伝承論序説』では苧環伝承となっている）である。この伝承は後に詳しく述べる。その前に三輪山伝承について詠んだ歌が『万葉集』巻第一一九に詠まれている。

一九 綜麻形^{トソガタ}の 林の崎の

さ野榛の 衣につくなす

目につく吾が背^{注五七}

「綜麻形」は三輪山を暗示させるといわれる。綜麻形は、古くにソマカタなどと読まれていたが、『僻案抄』ではミワヤマと読んだようである。^{注五八}ならば、ミワは三輪山伝承からきたと推察する。三輪とは、麻糸が糸巻に三巻残ったという物語より綜麻形を三輪山と読むという説から由来したといわれている。この説については様々な論が存在しているようだが、澤瀉久孝氏は次のように指摘している。

「綜麻形^{ヘソガタ}（條）」をやがて三輪山の表記として用ゐるに至つたと考へられないであろうか。「飛鳥^{トトリ}」を明日香^{アスカ}、「春日^{ハルヒ}」をカスガの表記とするに至つたと同じやうに。^{注五九}

綜麻形は三輪山を指すと考えておられる。つまり『万葉集』巻第一一九の和歌は、直接的に三輪山と表記されていないが、綜麻形は三輪山を示すと推察でき三輪山が登場する和歌と考えることができよう。冒頭で『万葉集』の中に三輪山は二十九首登場していると述べたのは、これらのことを考察したかったからである。また「綜麻形」以外にも、御諸山や三諸山などの表記で三輪山の和歌が詠まれている。その他の三輪山を舞台とした和歌は、『万葉集』巻第七 一〇九五の柿本人麻呂の作などがある。なお他の和歌については、後で一首考察し、その他の三輪山の和歌はここでは考察の対象としないこととする。

では次に三輪山伝承を考察していきたい。秋成が物語の場を構想するにあたり、三輪山に重点を置き作品を構成していったと考えられる。『古事記』『日本書紀』にはそれぞれに三輪山伝承が描かれている。まず『古事記』の三輪山伝承を要約すると以下のようになる。

阿部真司氏の『蛇神伝承論序説』では「芋環伝承」に該当する伝承といえよう。

容姿のたいへん美しい活玉依毘売のところへ、夜になると容姿の美しい男がやって来た。二人は互いに愛し合いながら男は通婚し、いくらもたないうちに毘売は懐妊する。それを知った毘売の両親は不思議に思い、夫の素性を知ろうと毘売に知恵を与えた。紡いだ麻糸を針に通し、その針を男の衣の裾に刺しておくといった知恵を教えたのである。毘売は教えられた通りに行動し、夜が明けて麻糸の行方を辿ると、その糸は三輪山の神の社のところまで続いていた。そのことによって毘売は夜毎に通ってくる男が大物主神だと知る。そして麻糸が糸巻に三巻残ったことから、当地を三輪と名付けられたといわれている。

三輪山の名の起源が描かれている伝承である。この伝承はのちに「蛇婿入り譚」として語り伝えられていく。それに対して『日本書紀』に収められた三輪山伝承を要約すると以下のようになる。「箸墓伝承」とされるのがそれである。

倭迹迹日百襲姫命のもとへ夜だけ通ってくる大物主神に、姫命はその美しい姿を昼間に拝見したいと願った。大物主神は答えて、明朝に姫命の櫛笥の中に入っているので、決して驚いてはいけないという禁忌を与えた。翌朝、姫命が櫛笥の中を見ると、美しい小さな蛇が入っていた。その姿は衣の紐のようであった。姫命は禁忌を忘れ、驚き叫んでしまう。すると大物主神は恥じて人の姿に化身し、今度はおまえにも恥をかかせようと言い御諸山へと帰って行った。そして姫命は、天を去り行く神を仰ぎ見て後悔し、箸で陰（女陰）を突いて死んでしまった。この姫命が埋葬された場所を箸墓という。

『古事記』『日本書紀』に共通する神として大物主神があげられる。大物主神を基点にした伝承とも考えられる。この神は美しい小さな蛇と示した如く蛇神である。大物主神を祭神として三輪山の山頂に奥津磐座という磐座が祀られている。^{注六〇}大物主神が三輪山の奥津磐座に鎮座しているといえる。これは三輪山が蛇神と関係が深い山であり、かつ「蛇性の姪」を構成するにおいて秋成が意図した要素の一つではないかと推測できる。また箸墓伝承にみられるように、倭迹迹日百襲姫命が禁忌を破ったために陰を突いて死んでしまったという出来事から、大物主神の神威の偉大さをみることができる。西郷信綱氏は『古事記注釈 第三巻』の中で、麻糸が戸の鍵穴から抜け出た表現に注目し、「古事記ではそうハッキリとはいっていないものの、「戸の釣穴」から外に出ていったというのは、このものがやはり蛇身であることを暗示する」と大物主神が蛇神であると指摘している。大物主神が蛇身と考えられ三輪山が大物主神を祀る山であるならば、この山は蛇と関係が深い山だと確信できる。あるいは、三輪山自体が蛇の御神体である山ともいえよう。これらの点から秋

成が三輪山を基準とした場所の構想を考えたのではないだろうか。つまり眞女子が蛇身である点とも深く関連するのである。

さらに大物主神について述べて三輪山を考察してみたい。『古事記』崇神天皇の段の中で、崇神天皇の御代に疫病が流行し人民が死に絶えようとしていた。天皇は嘆きつつ床についた。すると天皇の夢の中に大物主神が現れ、この疫病は私の意思によるものだとし、意富多々泥古おおたねこをして私を祀らせるならば疫病は治まるであろうと述べた。意富多々泥古は大物主神と活玉依毘売との子である。天皇は早速、意富多々泥古を捜し出し、三輪山で意富多々泥古を祀り主として大物主神を拝み祀った。すると疫病は治まり国家は平安を取り戻したという。三輪山伝承はこの出来事を前置きとして意富多々泥古が「神の子」である所以を述べた伝説として描かれている。この出来事から、大物主神は疫病を発生させる力を持つうえ、逆に疫病を治める力を持つほどの偉大な威力を持つ神だと考えられる。「荒ぶる神性」^{注六二}「崇る神性」と、「和める神性」^{注六二}「豊饒、平安の神性」という二面の神性を持つ神である。また三輪山については、大物主神を祭る三輪山が疫病の発生地とみなされるだけでなく、疫病の防御地ともみなされる。すなわち三輪山も発生地と防御地などのような二面性を持つ地といえよう。あるいはそれは現世と異界が共存し通じているような「境界の地」という役割を持っているのかもしれない。

では再び『万葉集』から三輪山の和歌に注目していきたい。『万葉集』巻第七 一〇九四には、三輪山は以下のように詠まれる。

一〇九四 我が衣 色どり染めむ

味酒 三室の山は^{みむろ}

もみちしにけり^{注六三}

「三室の山」は三輪山を示す。ならば、三輪山^{みむろ}＝御諸山^{みむろ}＝三室山とすべて同じ山を示しているといえる。ここでは三室の「ムロ」に注目してみたい。「ムロ」は『時代別国語大辞典』に「室・窟」と記され、「四囲がきっちり囲われ塞がれている室。自然の岩窟や、山腹などに掘って作られたものをも、また壁を塗りこめた家や部屋をもう」と定義されている。^{注六四}これに対して、阿倍真司氏は「ムロ」の定義を以下のように結論づけている。

「ムロ」には、(1)死者を葬る場 (2)死者の国(黄泉国、根国)、豊饒(海神国)という他界への通路であると同時にそこを塞ぐもの(妣の国は黄泉国、根国、海神国の意を含み持っている) (3)修業の場 (4)蛇の住む場 (5)神社の意味がある^{注六五}

それぞれ「ムロ」の定義からみると三輪山^{みむろ}＝三室山とするならば、三輪山は、表記の点

だけでなく、「ムロ」の定義にもあてはまる山といえよう。三輪山は大物主神が祀られる山という点から蛇の住む場である。また死者の国という他界への通路となる場とは、三輪山が現世と死者の国Ⅱ異界への入口といえる。すなわちここはまさしく現世と異界の境界の地であるといえよう。また「ムロ」から籠る場とも連想できるだろう。蛇と籠る意味は、蛇を象徴する「再生・復活」を行う場へと繋がっていく。つまり三輪山と蛇の関係は切り離せないものであることを証明している。

このように三輪山を考察してきた。秋成は、三輪山を直接作中に登場させているわけではないが、物語の中心的な場として三輪山を設定した意図は何であろうか。それは眞女子が蛇身であるという設定からくるだろう。眞女子Ⅱ蛇は、大物主神Ⅱ蛇神が鎮座する三輪山へと連想させることができる。第三章第一節「物語の発端 紀の國三輪が崎」で考察したように、三輪が崎は三輪山を連想させる場として設定されたと考えられる。物語の出発地から三輪山を連想させようとした点からも、物語の場が三輪山を中心として石榴市、泊瀬、吉野へと広がっているのである。三輪山は石榴市や泊瀬と地理的な位置関係から近い場所にあり、泊瀬のすぐ背後に位置している。眞女子は、三輪山を基点として蛇の持つ威力で石榴市・泊瀬・吉野などへの移動が可能であったのであり、豊雄を追うことができたのである。秋成は、作中に三輪山を登場させなくても眞女子Ⅱ蛇という設定や石榴市・泊瀬の位置関係から読者に三輪山を想像させることが可能であったのだろう。すなわち、三輪山は蛇神である大物主神が祀られる点や、三輪山Ⅱ三室山の「ムロ」という観点や、境界の地である点から、秋成は意図したのだと考えられる。

第五節 物語の転換地 吉野と芝の里

吉野と芝の里は物語の後半に登場する。吉野は桜の名所で有名であり、物語の中にも豊雄、眞女子、まろや、豊雄の姉夫婦が当地へ桜見物に行く場面において描かれている。それだけでなく、吉野は當麻の酒人の出現により眞女子とまろやの正体が見破られる場所でもある。當麻の酒人の登場により正体を見透かされた二人は、「此二人忽(ち)躍りたちて、瀧に飛(び)入(る)と見しが、水は大・おほぞいに湧あがりて見えずなるほどに」と滝に飛び込み逃げる。当地は眞女子にとって豊雄との恋愛が破綻するきっかけとなる地である。石榴市で豊雄と夫婦になり、眞女子の願いは叶った。眞女子は豊雄との石榴市での生活を続け

るのを望んでいた。少なくとも吉野へ行くことは避けたかった。吉野へ行くならば、豊雄との恋愛が終局を迎えるかもしれないと怖れていたのである。一方、豊雄にとっての吉野は、夢から覚めて現実に目を向けるきっかけの場所と考えられる。吉野は豊雄と眞女子の二人にとって対照的な意味を持つ場所に描かれる。なお秋成は実際に『雨月物語』が刊行された以前に吉野へ行ったことがみられる。『秋成年譜考説』の中で秋成が三十二歳の時に「大和・吉野金峯山登山行に出発」^{注六六}と記されている。一方芝の里へ移る経緯について、吉野で眞女子の正体を知った豊雄は當麻の酒人に「丈夫心なし」と諭される。豊雄は「己が心の正しからぬなりし」と改心して紀の國へ帰る。父母の考えを聞き入れ、芝の里の芝の庄司の女子・富子を妻に迎えることになり豊雄は芝の里へ移動するのである。物語の最後の場として芝の里が設定されている。では、秋成が物語の後半にこれらの地をどのような意図を持って作品に取り入れたのかという点を考察していきたい。

一、吉野についての考察

まず吉野について考察したい。吉野は冒頭で記したように古来からの桜の名所である。『古事記』や『日本書紀』の中で天皇が当地へ行幸したといわれる。『古事記』神武天皇の条に、神武天皇が八咫鳥の先導により吉野へ入る描写が記述されている。「其の八咫鳥の後より幸行せば、吉野河の河尻に至りし時に」^{注六七}と登場する。神武天皇は吉野で阿陀の鵜養の祖先の贅持之子、吉野首らの祖先の井氷鹿^{いひか}、吉野の国巢の祖先の石押分之子らと出会うと描かれている。『万葉集』には、吉野が舞台の和歌がみられる。吉野の表記は、「吉野」だけでなく「芳野」や「み吉野」などと表される。「み吉野」は吉野の美称であり、吉野は「秋津野」とも表されている。『万葉集』巻第一 三六の柿本人麻呂の作に用例がある。

三六 やすみしし 吾が大君の

聞こしめす 天の下に

國はしも さはにあれども

山川の 清き河内と

御心を 吉野の國の

花散らふ 秋津の野邊に

宮柱 太敷きませば

もゝしきの 大宮人は

船並めて 朝川渡り

舟競ひ 夕川渡る

此の川の 絶ゆる事なく

此の山の 彌高しらす

みなぎらふ 瀧のみやこは

見れどあかぬかも

注六八

この和歌は柿本人麻呂が天皇の吉野宮への行幸に随行した時に詠んだ長歌である。吉野への讃辞が詠まれている。伊藤博氏は『万葉集全注 巻第一』の中で「吉野の国」の意味を以下に解釈している。

「国」は人によって定めた一定区域。大和（奈良）の一部でありながら、とくに「国」と呼ばれる土地は、この吉野と泊瀬と春日と難波とに限られる。いずれも格別な地域であると意識されていたことに基づく。注六九

吉野は特別な地域と考えられた。格別な地域とは聖空間を意味すると想像する。泊瀬も吉野と同様に特別な空間である。特別な空間とは霊力を持つ霊地であると考えられる。

さらに「秋津野」という表現は、吉野川を挟んで宮滝とその対岸へかけて喻えられたものといわれる。吉野離宮を「蜻蛉乃宮」アキツノミヤと示し、吉野川を「秋津乃川」と示している。秋津野は吉野の意味である。なお秋津野については後で再び考察したい。『万葉集』の中で、吉野・芳野・み芳野・秋津野などの表現を含めて吉野を詠んだ和歌は、七十一首存在するだろう。まず『万葉集』巻第七 一一三〇を記す。

一一三〇 神さぶる 磐根イハネしき

み芳野の 水分山をみくまり

見ればかなしも注七〇

この和歌からも吉野は霊的なものが存在する地と考えられる。いわゆる霊地を示す。澤瀉久孝氏は水分山を「その水を配分する神を祭つた山」注七一と解釈している。吉野もまた三輪山や泊瀬と同様に籠った霊的な地だと考えられる。阿部真司氏は『蛇神伝承論序説』の中で「吉野のあの華やかな色彩に色どられた桜とその観桜の宴の背後には死の影がつきまとう」注七二と述べられ、吉野を「死」と関連させている。『万葉集』巻第三 四二九と四三〇は、死者を連想させるような和歌である。いずれも柿本人麻呂が詠んでいる。

四二九 山の際まゆ 出雲の子らは

霧なれや 吉野の山の

嶺にたなびく注七三

四三〇 八雲さす 出雲の子らの

黒髪は 吉野の川の

おきになづさふ 注七四

四二九と四三〇は相對した和歌である。山の嶺にたなびく表現と川の沖になづさふ表現からみられる。出雲の子は霧ではないが、もうすでに火葬され煙となって吉野山にたなびく。それを霧であるのかと喩えて解釈する。火葬されたとは、出雲の子Ⅱ死者を意味する。同じように四三〇も出雲の子の死を意味し、その黒髪が吉野川に流れる状態を詠んでいる。出雲の子Ⅱ死者である。つまり泊瀬が死者を葬る場所と考えられ、泊瀬が死と関連のある籠る地帯であったように、吉野も死と関係する地とされ籠る地帯と考える。それは阿部氏が述べた「死の影」とも繋がる。また秋津野も死者と関わる場所として詠まれる。『万葉集』卷第七 一四〇五の晩歌を記す。

一四〇五 秋津野を 人のかくれば

朝蒔きし 君が思ほえて

嘆は止まず 注七五

解釈は「秋津野の事を人が口に出していふので、朝その野で火葬した灰を蒔き散した君の事が思はれて嘆はとまらない」注七六である。このことから秋津野は死者を火葬する場だと連想できる。秋津野Ⅱ吉野は死者を火葬させる場の一面を持ち、死者を葬る場所だと考える。死と関連する場所ならば逆に生も存在する場所といえよう。生と死が存在するような、すなわち現世と異界が共に存在している境界の地である可能性が高い。

そして眞女子が飛び込んだ滝に着目したい。眞女子は宮滝に飛び込む。宮滝が流れる吉野川は紀ノ川に繋がる。大和國では吉野川、紀の國に入ると紀ノ川となる。蛇は水神の役割を持つ。眞女子は滝に飛び込み一旦逃げる。豊雄が紀の國へ帰り芝の里へ移ったと同様に眞女子も川を泳ぎ豊雄を追ったと考えられる。水神の面を持つ眞女子にとっては簡単なものである。吉野川を経由して眞女子は移動が可能であった。

本来ならば、吉野が境界の地であることが眞女子にとって有利な場所なのかもしれないが、眞女子は逃げざるを得ない場所となった。当地は彼女の地母神性が發揮される地であるのだが、當麻の酒人の出現により不可能となる。「眞女子にとって吉野とは彼女の本来的位置づけができなくなってしまった空間」注七七なのかもしれない。それにより豊雄との恋愛は終局を迎えると予想される。秋成はこのような意図を持って吉野の地を選んだのではないかと考える。

二、芝の里についての考察

次に芝の里を考察していく。芝の里の位置は諸説存在し、作者が当地を選んだ意図は未だはっきりと明らかにされていない。しかし芝の里の考察を試みたい。

芝の里の位置についてはさまざまな説が存在する。諸説の引用が長くなるが記しておく。芝の里は以下のように考えられている。

①和歌山縣東牟婁郡下里町か。^{注七八}

②古の熊野道の宿駅。鍛冶屋川のものき橋があった。和歌山縣西牟婁白浜町の中。^{注七九}

③後の道成寺説話との結びつきから考えて、この「芝の里」は和歌山縣西牟婁郡中辺路町（明治二十二年の町村制発布前までは芝村といい、現在でも同町の栗栖川の小路に、上芝・中芝・下芝の称が残っている）栗栖川付近をさすものと見たい。（中略）なぜ私がこの「芝村」（今の中辺寺町）を「芝の里」とするかというと、この芝村の付近が道成寺説話（安珍清姫伝説）で名高い清姫の生誕地「真砂の庄」（中辺路町大字真砂）であったからである。秋成は、舞台を「芝の里」に変えることによって、道成寺説話を取り入れる用意を示したのであるから、安珍が通い、清姫が住み、清姫が安珍を追った旧中辺路を舞台に選んだと考えるのが最も至当である。^{注八〇}

④大和國磯城郡織田村芝をいひ、三輪町の北方。^{注八一}

⑤さまざまの土地が考えられているが、現在の和歌山縣西牟婁郡中辺路町栗栖川付近とする鶴月洋氏の説に従いたい。古代、熊野道の宿駅であったという。^{注八二}

⑥諸説あるが、古代の熊野道（中辺路）に沿う旧芝村と考えたい。和歌山縣西牟婁郡中辺路町。道成寺伝説の舞台でもあった。^{注八三}

⑦大和國磯城郡三輪村の北（佐藤仁之助氏註、諸註多くこれに従ふ）とはいふものの實は明らかでない。ただ、作者秋成は根なしごとの小説を作るにも、在りもしない地名を用ゐるやうな人ではない。この芝といふのは紀州の東牟婁郡の太田川の川口に下里といふ所があるが、その南にあたる對岸に地を指したのではあるまいか、其所ならば芝といふ地名に強ち・故がないでもない。（中略）舞臺が再び紀伊に戻つたなと感じさせたとたん、「芝の里」と直ちに筆をつけたところから、紀伊の内で、新宮の近くにあつたと見るのもよささうである。^{注八四}

芝の里について七説あげた。これらの説は四説に分類できるだろう。第一の説は、①重友穀氏『上田秋成集』と⑦今泉忠義氏『秋成研究資料集成』での和歌山縣東牟婁郡下里町とする説。さらに今泉氏は、「新宮の近くにあつたと見るのもよささう」と見解を加えてい

る。第二の説に、②中村幸彦氏『日本古典文学大系』での、和歌山県西牟婁郡白浜町とする説。第三の説に、③鵜月洋氏『雨月物語評釈』、⑤浅野三平氏『新潮日本古典集成』、⑥中村幸彦・高田衛・中村博保氏『新編日本古典文学全集』において考えられている、和歌山県西牟婁郡中辺路町栗栖川付近とする説。そして第四の説に、④和田萬吉氏『評釋江戸文學叢書第九卷』で指摘している奈良県（大和國）磯城郡三輪村の北部とする説である。いずれも和歌山県か奈良県のどちらかが考えられる。

秋成が芝の里を物語の中に組み入れ意図したものは、鵜月洋氏が指摘されているように、道成寺伝承と関係するのではないだろうか。つまり芝の里は、和歌山県西牟婁郡中辺路町付近だとする第三の説に従いたい。吉野で眞女子の正体が暴かれ、豊雄は紀の國へ帰り、芝の里の庄司の女子・富子を妻に迎える。しかし、富子との結婚二日目の夜に眞女子が富子に乗り移り豊雄の前に現れる。吉野から芝の里へ舞台を移すと同時に、ここでも「逃げる男と追う女」のモチーフが描かれている。すでに述べてきたように、「逃げる男と追う女」は道成寺伝承にもあてはまっている。前半の三輪が崎から石榴市へ豊雄が移動し眞女子が追う設定よりも、後半の吉野から芝の里へ豊雄が移動し眞女子が追う設定が、一層、女の執着心を表しているといえよう。物語が後半に進むにつれて「逃げる男と追う女」のモチーフは強くなっていくように考えられる。また作中に豊雄を救う僧として道成寺の法海和尚が登場する。伝承の構造を取り入れただけでなく道成寺も登場させているので、道成寺伝承と関係する第三の説が有力ではないかと考えられる。

芝の里とされる場所から道成寺までの距離を推測してみると、作中には「道遥なれば夜なかばかりに蘭若に到る」とある。芝の里を出発してからその日の夜半に道成寺に到着したことになる。あまり距離が遠くない場所と推測できるだろう。鵜月氏は距離に注目し、「大三輪町から道成寺までは直線コースにしても百キロ以上、下里町からも百キロ近くあり」と指摘している。大三輪町は三輪村の北部を指す。その日のうちに目的地へ到着するのは当時では困難だと考えられる。第一の説と第四の説は距離の観点において考え難いといえる。次に第二の和歌山県西牟婁郡白浜町とする説はどうだろうか。白浜町から道成寺までは四十キロ程あるといわれ、第一・四の説の距離より近い。その日のうちに到着できる距離といえよう。作中から考えて「鞍馬寺の僧の、年々熊野に詣づるが、きのふより此向岳の蘭若に宿りたり」から、少なくとも芝の里は熊野参詣の路であった可能性が高いだろう。白浜町の芝村の位置は「北は十九淵村、東は高瀬村、西は富田川を挟んで中村。富田浦の一村で、集落は熊野街道大辺路に沿って散在する」とされ、熊野路と関係すると

考えられよう。だが「芝の庄司」との関連を考えると白浜町が芝の里である可能性は弱いといわれている。^{注八七} 対して第三の説、中辺路町栗栖川の芝村の位置は、「北と東は高原村、南は真砂村、西は鍛冶屋川の小皆。南部を熊野街道中辺路がかすめる」とされる。^{注八八} 注目するのが「真砂村」である。真砂村は、「この地を道成寺にまつわる安珍清姫伝説にみえる清姫の誕生地」^{注八九}といわれている。中辺路町栗栖川付近は道成寺伝承と関係のある真砂村に距離的に近いと推察する。中辺路町から道成寺までの距離は四十キロほどである。このような点から芝の里は第三の説の和歌山県西牟婁郡中辺路町栗栖川付近と考えられる。

したがって秋成が芝の里を物語の最後の地とした意図は、前述したようにやはり道成寺伝承から考えられる。芝の里で道成寺の和尚が登場する点などから秋成が物語に道成寺伝承を取り入れたのは明らかである。当地の位置を第三の説としたならば、芝の里が芝村だと読者に暗示させ物語に道成寺伝承を取り入れていることを秋成は表したのであろう。道成寺伝承で有名な清姫の生誕地である真砂村付近の芝村を「芝の里」としたのである。「追う女」を眞女子としたのは真砂村から名付けられたと考えられる。

注一 「角川日本地名大辞典」編纂委員会 竹内理三 編

『和歌山県 角川日本地名大辞典30』 角川書店 昭和六〇年七月八日

一〇一三頁

注二 澤瀉久孝『萬葉集注釋卷第三』 中央公論社 昭和三年一〇月一五日 一〇三頁

注三 澤瀉久孝『萬葉集注釋卷第七』 中央公論社 昭和三年九月一〇日 一六六頁

注四 前掲 澤瀉久孝『萬葉集注釋卷第七』 中央公論社 一六六—一六七頁

注五 高木市之助 五味智英 大野普 校注

『萬葉集 二 日本古典文学大系5』 岩波書店 昭和三四年九月五日 二二九頁

注六 中村幸彦 校注『上田秋成集 日本古典文学大系56』 岩波書店

昭和三四年七月六日 一〇〇頁

注七 小島憲之 直木孝次郎 西宮一民 蔵中進 毛利正守 校注

『日本書紀① 新編日本古典文学全集2』 小学館 一九九四年四月二〇日

二〇一—二〇二頁

注八 前掲 小島憲之 直木孝次郎 西宮一民 蔵中進 毛利正守 校注

『日本書紀① 新編日本古典文学全集2』 小学館 二〇二—二〇三頁

注九 山口佳紀 神野志隆光 校注

『古事記 新編日本古典文学全集1』 小学館 一九九七年六月二〇日 一四五頁

注一〇 先掲 小島憲之 直木孝次郎 西宮一民 蔵中進 毛利正守 校注

『日本書紀① 新編日本古典文学全集2』 小学館 二〇二頁

注一一 新宮市史編さん委員会 編

『新宮市史』新宮市役所 昭和四七年一〇月三〇日 六九頁

注一二 前掲 新宮市史編さん委員会 編 『新宮市史』 新宮市役所 六九頁

注一三 前掲 新宮市史編さん委員会 編 『新宮市史』 新宮市役所 六九頁

注一四 前掲 新宮市史編さん委員会 編 『新宮市史』 新宮市役所 六九頁

注一五 野本寛一『熊野山海民俗考』 人文書院 一九九〇年一月三〇日 一二頁

注一六 先掲 山口佳紀 神野志隆光 校注

『古事記 新編日本古典文学全集1』 小学館 四三頁

注一七 先掲 小島憲之 直木孝次郎 西宮一民 蔵中進 毛利正守 校注

『日本書紀① 新編日本古典文学全集2』 小学館 四一頁

注一八 前掲 小島憲之 直木孝次郎 西宮一民 蔵中進 毛利正守 校注

注一九 『日本書紀① 新編日本古典文学全集2』 小学館 四一頁
先掲「角川日本地名大辞典」編纂委員会 竹内理三 編

『和歌山県 角川日本地名大辞典30』 角川書店 三八八頁
注二〇 安原眞琴「熊野をめぐる近世文学―「蛇性の姪」と熊野」

「国文学解釈と鑑賞 別冊」 至文堂 平成一九年一月一日 一四四頁

注二一 菊地靖彦 木村正中 伊牟經久 校注

『土佐日記 蜻蛉日記 新編日本古典文学全集13』 小学館

一九九五年一〇月一〇日 一六〇頁

注二二 松尾聰 永井和子 校注

『枕草子 新編日本古典文学全集18』 小学館 一九九七年一月二〇日

四六頁

注二三 前掲 松尾聰 永井和子 校注

『枕草子 新編日本古典文学全集18』 小学館 四六頁

注二四 日本国語大辞典第二版編集委員会 小学館国語辞典編集部 編

『日本国語大辞典 第二版 第二卷』小学館 二〇〇一年二月二〇日 二六二頁

注二五 日本古典文学大辞典編集委員会 編

『日本古典文学大辞典 第一卷』 岩波書店 一九八三年一〇月二〇日

二八六頁

注二六 澤瀉久孝『萬葉集注釋卷第十二』 中央公論社 昭和三八年七月五日 九六頁

注二七 前掲 澤瀉久孝『萬葉集注釋卷第十二』 中央公論社 二〇八頁

注二八 前掲 澤瀉久孝『萬葉集注釋卷第十二』 中央公論社 九七頁

注二九 前掲 澤瀉久孝『萬葉集注釋卷第十二』 中央公論社 二〇八頁

注三〇 前掲 澤瀉久孝『萬葉集注釋卷第十二』 中央公論社 九七頁

注三一 小島憲之 直木孝次郎 西宮一民 蔵中進 毛利正守 校注

『日本書紀② 新編日本古典文学全集3』 小学館 一九九六年一〇月一〇日

二七〇頁

注三二 前掲 小島憲之 直木孝次郎 西宮一民 蔵中進 毛利正守 校注

『日本書紀② 新編日本古典文学全集3』 小学館 二七一頁

注三三 先掲 日本古典文学大辞典編集委員会 編

『日本古典文学大辞典 第一卷』 岩波書店 二八六頁

注三四 阿部秋生 秋山虔 今井源衛 鈴木日出男 校注

『源氏物語① 新編日本古典文学全集 20』 小学館 一九九四年三月一日

一〇四頁

注三五 前掲 阿部秋生 秋山虔 今井源衛 鈴木日出男 校注

『源氏物語① 新編日本古典文学全集 20』 小学館 一一一頁

注三六 前掲 阿部秋生 秋山虔 今井源衛 鈴木日出男 校注

『源氏物語① 新編日本古典文学全集 20』 小学館 一一六頁

注三七 鶴月洋『雨月物語評釈』 角川書店 昭和四四年三月一〇日 五二〇頁

注三八 松尾聰 永井和子 校注

『枕草子 新編日本古典文学全集 18』 小学館 一九九七年一月二〇日

四六頁

注三九 先掲 阿部秋生 秋山虔 今井源衛 鈴木日出男 校注

『源氏物語① 新編日本古典文学全集 20』 小学館 一九九四年三月一日

一〇四頁

注四〇 「角川日本地名大辞典」編纂委員会 竹内理三 編

『奈良県 角川日本地名大辞典 29』 角川書店 一九九〇年三月八日 八七八頁

注四一 澤瀉久孝『萬葉集注釋卷第一』 中央公論社 昭和三二年一月一〇日

三一五頁

注四二 前掲 澤瀉久孝『萬葉集注釋卷第一』 中央公論社 三一六頁

注四三 日本国語大辞典第二版編集委員会 小学館国語辞典編集部 編

『日本国語大辞典 第二版 第五卷』 小学館 二〇〇一年五月二〇日

一〇九四頁

注四四 中村幸彦 岡見正雄 阪倉春樹 編

『角川古語大辞典 第二卷』 角川書店 昭和五九年三月一〇日 五六三頁

注四五 先掲 澤瀉久孝『萬葉集注釋卷第三』 中央公論社 五三一頁

注四六 先掲 澤瀉久孝『萬葉集注釋卷第七』 中央公論社 三七九頁

注四七 前掲 澤瀉久孝『萬葉集注釋卷第七』 中央公論社 三八一頁

注四八 澤瀉久孝『萬葉集注釋卷第十六』 中央公論社 昭和四一年六月三〇日 七九頁

注四九 西郷信綱『古代人と夢』 平凡社 一九九九年二月二〇日 九一頁

注五〇 前掲 西郷信綱『古代人と夢』 平凡社 九一頁

注五一 澤瀉久孝『萬葉集注釋卷第十三』 中央公論社 昭和三十九年三月二五日

九八—九九頁

注五二 先掲 西郷信綱『古代人と夢』 平凡社 八九頁

注五三 前掲 西郷信綱『古代人と夢』 平凡社 九五頁

注五四 河合隼雄『河合隼雄著作集 第五卷』岩波書店 一九九四年三月一〇日 二三頁

注五五 先掲 澤瀉久孝『萬葉集注釋卷第一』 中央公論社 昭和三十二年十一月一〇日

一八七頁

注五六 前掲 澤瀉久孝『萬葉集注釋卷第一』 中央公論社 一八七頁

注五七 前掲 澤瀉久孝『萬葉集注釋卷第一』 中央公論社 一九五頁

注五八 前掲 澤瀉久孝『萬葉集注釋卷第一』 中央公論社 一九五頁

注五九 前掲 澤瀉久孝『萬葉集注釋卷第一』 中央公論社 一九八頁

注六〇 阿部真司『蛇神伝承論序説』 新泉社 一九八六年九月三〇日 二六頁

注六一 西郷信綱『古事記注釈 第三卷』 平凡社 一九八八年八月二五日 一九二頁

注六二 先掲 阿部真司『蛇神伝承論序説』 新泉社 一七七頁

注六三 先掲 澤瀉久孝『萬葉集注釋卷第七』 中央公論社 三六頁

注六四 上代語辞典編修委員会 編

『時代別国語大辞典 上代編』 三省堂 一九九四年一〇月一日 七三一頁

注六五 先掲 阿部真司『蛇神伝承論序説』 新泉社 一八二頁

注六六 高田衛『秋成年譜考説』 明善堂書店 昭和三十九年一月三〇日 四〇頁

注六七 先掲 山口佳紀 神野志隆光 校注

『古事記 新編日本古典文学全集1』 小学館 一四九頁

注六八 先掲 澤瀉久孝『萬葉集注釋卷第一』 中央公論社 二七九—二八〇頁

注六九 伊藤博『万葉集全注 卷第一』 有斐閣 昭和五十八年九月八日 一五四頁

注七〇 先掲 澤瀉久孝『萬葉集注釋卷第七』 中央公論社 七六頁

注七一 前掲 澤瀉久孝『萬葉集注釋卷第七』 中央公論社 七六頁

注七二 先掲 阿部真司『蛇神伝承論序説』 新泉社 一六〇頁

注七三 先掲 澤瀉久孝『萬葉集注釋卷第三』 中央公論社 五三二頁

注七四 前掲 澤瀉久孝『萬葉集注釋卷第三』 中央公論社 五三四頁

注七五 先掲 澤瀉久孝『萬葉集注釋卷第七』 中央公論社 三七七頁

注七六 前掲 澤瀉久孝『萬葉集注釋卷第七』 中央公論社 三七七頁

- 注七七 先掲 阿部真司『蛇神伝承論序説』 新泉社 一六二頁
- 注七八 重友毅『上田秋成集』 朝日新聞社 昭和三二年二月一日 一四五頁
- 注七九 中村幸彦 校注
- 『上田秋成集 日本古典文学大系56』岩波書店 昭和三四年七月六日 一一五頁
- 注八〇 先掲 鵜月洋『雨月物語評釈』 角川書店 五三九頁
- 注八一 和田萬吉『評釋江戸文學叢書 第九卷』 講談社 昭和四五年九月二五日 一一七頁
- 注八二 浅野三平『新潮日本古典集成(第二二回) 雨月物語 癩癖談』 新潮社
昭和五四年一月一日 一二三頁
- 注八三 中村幸彦 高田衛 中村博保 校注
『英草紙 西山物語 雨月物語 春雨物語 新編日本古典文学全集78』 小学館
一九九五年一月一日 三八〇頁
- 注八四 今泉忠義『雨月物語精解 秋成研究資料集成 第9巻』 クレス出版
二〇〇三年一月二五日 二七一頁
- 注八五 先掲 鵜月洋『雨月物語評釈』 角川書店 五三九頁
- 注八六 有限会社平凡社地方資料センター 編
『奈良県の地名 日本歴史地名大系第三〇巻』 平凡社 一九八一年六月二三日 六〇四頁
- 注八七 先掲 鵜月洋『雨月物語評釈』 角川書店 五三九頁
- 注八八 先掲 有限会社平凡社地方資料センター 編
『奈良県の地名 日本歴史地名大系第三〇巻』 平凡社 六一五頁
- 注八九 前掲 有限会社平凡社地方資料センター 編
『奈良県の地名 日本歴史地名大系第三〇巻』 平凡社 六一四頁

結び

第一章は道成寺伝承について問題点の解明につとめた。道成寺伝承の変身過程において、「籠り型」と「川渡り型」に分類できるが、第一節ではこの二種類の型の意味と蛇に変身する意味について考察してきた。「籠り型」は若い僧に裏切られた女が、家に帰り隔舎や寝屋に閉じ籠り、しばらくすると大蛇に変身する型であり、「川渡り型」は若い僧を追いかけた女が、川に入ったために大蛇に変身する型である。「籠り型」の籠る空間とは、聖なる空間という意味を持ち、死や復活を意味した場所であると考察した。一方「川渡り型」は、川に入った時に水の呪力に触れて大蛇に変身する点から水の呪力と関係がある型といえる。水の呪力とは、復活や再生という意味を表している。水の呪力に触れ大蛇に変身し水神となり川を渡る型である。

次に蛇に変身する意味を解明した。道成寺の伝承構造の最も古いものはイザナミ命伝承である。またヒナガヒメ伝承とも関係がある。蛇身という点やこの二つの伝承が道成寺伝承に取り入れられたので、必然的に女が蛇に変身する要素も取り入れられたのである。

そして節の最後に道成寺伝承と「蛇性の姪」の関係を考えた。第一に舞台が紀伊国である点、第二に豊雄が三輪が崎から石榴市へ移動するように眞女子も石榴市へ移動することから、逃げる男と追う女というモチーフが組み込まれている点などが関係する。

第二章は、原典「白娘子永鎮雷峯塔」から「蛇性の姪」への換骨奪胎の方法と在り方を考察した。第一節は豊雄の人物像を問題点にあげた。「過活心」を持ち得ない豊雄が次第に「丈夫心」を持つとうとする者へと成長する点に注目した。また原典「白娘子永鎮雷峯塔」の許宣をとりあげて秋成が豊雄を設定した意図を考察した。豊雄は美男で、「生長優しく、常に都風たる事をのみ好（み）て、過活心なかりけり」という勤労を好まない、生産体系から外れた余計者である。都への憧れも抱いている。しかし吉野での出来事を通じて次第に「おのが命ひとつに人々を苦しむるは実ならず」と丈夫心を持つとうと変わっていったのである。次に原典「白娘子永鎮雷峯塔」の許宣は美男で真面目な青年という人物像が浮かぶ。秋成は原典の要素を取り入れつつも豊雄を許宣とは異なった人物像に創造している。それは、秋成は自分の青年時代を「浮浪子^{のちもの}」と称し豊雄と自分の姿を重ねているからだと考えられる。

第二節は眞女子の人物像を考察した。眞女子は「顔容髪のかゝりいと艶ひやか」な容姿端麗な女性であり、豊雄へ愛されたいがために行動する純粋な性格の女性である。物語の

後半にかけて豊雄を追う「執ねき」の執念深さを併せ持つ女性であると考察する。そうして、第一に彼女の外面的な描写が多く描かれている点、第二に眞女子Ⅱ蛇と女の関係及び蛇と水の関係、第三に秋成が眞女子を設定した意図を考えていった。

第一に眞女子には外面的な描写が多く描かれている。それは彼女が異類であることを隠すために容姿などを強調して描き、または異類だからこそ力を発揮して美しい容姿の女性に変身できたのだと考えた。また眞女子は豊雄に喜ばれたいと願う純粋な女性と変わらない。そこから、眞女子の豊雄への願望や執着心を強調するために秋成は眞女子の外見などの描写を多く描いたと考えた。第二に眞女子Ⅱ蛇と女の関係及び蛇と水の関係を考察した。蛇と女の関係はイザナミ命と関係する。イザナミ命は女神でかつ蛇神ならば、イザナミ命を基にして考えられるだろう。「蛇性の姪」の作品構造、道成寺の伝承構造、イザナミ命の伝承構造は似ている。眞女子の人物像は、道成寺伝承やイザナミ命伝承の構造も眞女子の人物像を創造する一つの要素だと考えた。また蛇と水の関係について、蛇は水神の役割を持つ点やヒナガヒメ伝承と関係する点などがあげられる。第三に秋成が眞女子を設定した意図を考えた。蛇性を人間に置き換えて、異類の積極的で自主的な純粋な愛と封建社会の恋愛のゆがみを描くために、眞女子の人物像を設定したと結論づけた。

第三節は豊雄の家族関係とその中で豊雄の位置づけを問題点とした。父、母、兄、姉、豊雄、兄嫁、姉婿が彼の家族構成である。まず、父は豊雄にとって遠い存在である。また、彼の母は物語にほとんど登場しないことから、彼にとつては機能しない存在といえる。兄は生産意欲のない豊雄と対照的な人物に描かれている。父と同様遠い存在である。しかし姉とは仲が良い。姉は弟豊雄を可愛がり弟豊雄も姉を頼りにしている。兄嫁は豊雄に協力し豊雄も兄嫁を頼っている関係といえる。つまり父・母・兄は、当時の家の論理を優先しているため非生産的な豊雄を厄介者と思う一方で、姉や兄嫁は豊雄を可愛がり豊雄も姉や兄嫁を頼っている関係となる。豊雄は、男性には疎ましい厄介者の存在と考えられ、母を除く女性には、母性をそそる愛らしい存在と位置づけられる。

第四節は三人の僧を秋成が設定した意図を考えると、物語の結末部を考察対象とした。第一に三人の僧について考えた。當麻の酒人は吉野で眞女子の正体を見破る人物であり、敵対した存在である。当麻は二上山東麓の地名でこの二上山の位置は三輪山と対している。秋成は三輪山と二上山の位置が対称的にあることから、眞女子Ⅱ蛇と當麻の酒人の関係も相対する構成と創造したと考えられる。次いで二人目の鞍馬寺の僧についてであるが、鞍馬寺には竹伐り会式という行事が行われている。竹を蛇に見立てて切り勝負を競

うという。こうしたことから鞍馬寺と蛇が関係することが指摘されている。しかし作中に登場する鞍馬寺の僧は蛇の毒気に遭い亡くなる。それは眞女子Ⅱ蛇の強さを示していると考えられる。最後の法海和尚は、原典「白娘子永鎮雷峯塔」から取り入れたのだろう。名前も僧の役割も同じなので秋成はそのまま原典を取り入れたと考えられる。第二に結末部を考察した。「蛇性の姪」と原典は両方、男主人公は生き延び、女主人公は鉢の中に入れられ、土や塔の中に閉じ込められて物語は終わる。注目は眞女子を殺さずに閉じ込めた点である。それは、眞女子が何十年か何百年か後に再び地上へ出て同じような事件を起こすことを読者に想像させる。そこから蛇の死と再生・復活という象徴を連想させている。以上から秋成は結末部を創作したといえよう。

第三章では場の問題を考えてきた。それぞれ物語の場所をあげていき、秋成はその地をどのような意図を持って作品に構成したのかという点を問題点とした。第一節は紀の國三輪が崎及び熊野について述べた。第一に、『万葉集』に登場する三輪が崎の和歌から、三輪の崎Ⅱ神の崎という解釈に焦点を当てて考察した。『万葉集』巻第三 二六五は三輪が崎が舞台の和歌である。三輪の崎を「神之埼」と表わし、「神」を「ミワ」と読む。三輪は神を連想させる地と推察する。第二に、『古事記』と『日本書紀』において三輪か崎が登場する場面を取り上げ、それらの場面と「蛇性の姪」との関係を考えて。「蛇性の姪」において、鞍馬寺の僧が眞女子を退治しようとするが、毒気にあてられて命を失う場面がある。それは、『日本書紀』神武天皇の段、天皇たちが熊野へ到着した際に暴風雨に遭遇し、その時悪神が現れ毒気を吐き、皆気を失う場面から取り入れられたのではないかと考察した。対して『古事記』では、神の化身とされる大きな熊が現れその毒気に当てられて、皆気を失い倒れることが描かれている。この場面を秋成が参考とした可能性が高いと考えた。第三に、秋成が物語の出発地に紀の國三輪が崎を設定した意図を考えてみた。それは、三輪が崎が物語の中心的な場となる三輪山伝承を連想させるものとして選ばれたことから考えられる。さらに紀の國及び熊野一带についても考察を試みた。熊野の由来を諸説上げ、かつ『古事記』と『日本書紀』からイザナミ命が葬られた場所に注目して考察した。熊野の由来は、諸説存在するが、その中でも「熊野とはこもりぬ隠野で、死者の隠れるところであり、『万葉集』などにもよく歌われているこもりく隠国と同義だとされている」という説が有力だと考える。そこから熊野は塞がれた籠った地といえよう。それだけでなく、熊野は現世と異界が存在する両義性を持つ場と想像する。第五にイザナミ命が葬られた場所を考察した。『古事記』には、「比婆之山」とされている。対して『日本書紀』では「熊野の有馬村」とされている。『日

本書紀』の記述から熊野は黄泉国との境界の地という考えに至った。よって秋成が紀の國三輪が崎及び熊野一帯を設定した意図に、当地が境界の地としての役割を持ったためだと考えられる。それは異類の眞女子にとって豊雄と出会うための地であると考えられよう。

第二節は石榴市を問題点にした。石榴市は出合いの地であり、当地を作中では二人の再会の場と定めている。出合いの場と再会の場を着目点とした。石榴市は「歌垣の地」という男女の出合いの場として古代から著名である。その地を秋成が組み入れた意図に、男女が出会う場という考えから男女の愛を深める場と考えられる。つまり豊雄と眞女子が石榴市で婚儀を行うことと合致する。それは二人が愛を深め合うことを暗示させる意図があったからだろう。さらに『源氏物語』『玉鬘』の巻に描かれている玉鬘と右近の再会が石榴市であった点も設定された意図と考えられる。

第三節に泊瀬の考察を行った。『万葉集』の中で泊瀬は、主に「こもりくの泊瀬」と表現されている。この「隠国」という表現に着目し考察していった。隠国とは『角川古語大辞典』の中で、「く」は場所を表し、こもる場所の意。四方を山に囲まれた場所の意で、地名、泊瀬にかかるというが、古代には、この地は墓所であり、祖霊のこもる地として恐れられていたらしく^{注二}と解釈される。死者を葬る場所や祖霊が籠る地といえる。それは現世と異界を繋ぐ境界の地である。また籠る地は蛇と関係が深いとみられ、復活や再生をする地とも考えられる。

第四節は三輪山を考察した。まず『古事記』と『日本書紀』に記述されている「三輪山伝説」をとりあげて、三輪山に祀られる大物主神＝蛇神に焦点を当てて解明する。次に『万葉集』の中に詠まれている三輪山の「三輪山＝三室山」という考えから、「ムロ」の定義に着目し問題点を明らかにしていく。『古事記』の三輪山伝承はいわゆる芋環伝承にあたるものである。一方『日本書紀』は箸墓伝承にあたるものとされる。二つの文献に共通する神が大物主神である。大物主神は蛇神であり三輪山の奥津磐座に鎮座する。三輪山が蛇神と関係が深い山だという裏付けになる。さらに『古事記』で疫病が人民の間に広がる伝説に触れ、三輪山が疫病の発生地と防御地という二面性を持つ地とも考えられる。三輪山もまた現世と異界が共存し通じているような「境界の地」であるという考えに至った。次に『万葉集』で「三輪山＝三室山」を意味する解釈から「ムロ」の定義を考察した。「ムロ」は五説考えられている。一説に、死者の国という他界への通路となる場という説から、三輪山が現世と異界の境界の地を示すと解釈した。

最後に第五節で吉野と芝の里の問題点を取り上げた。吉野は『万葉集』の中に詠まれる

和歌から解明しようとした。その中でも「秋津野」という表現から考察を行った。秋津野は吉野を指し、死者を火葬する場である。吉野は霊的なものが存在する地とも考えられる。すなわち生と死が共存するような、現世と異界が存在する境界の地の面を持つ場所とみられる。さらに、芝の里の考察を試みてみた。この地が選ばれた意図は未だ明確にされていないが、諸説取り上げて解釈を行った。芝の里は諸説存在する。四説に分類できる。その中でも和歌山県西牟婁郡中辺路町栗栖川付近とする説に従いたい。この説は道成寺伝承と関連している。物語内においても、伝承の構造を取り入れるだけでなく後半に道成寺の法海和尚を登場させていることに従い、この説が有力ではないかと考えたのである。

注一 新宮市史編さん委員会 編

『新宮市史』 新宮市役所 昭和四七年一〇月三〇日 六九頁

注二 中村幸彦 岡見正雄 阪倉春樹 編

『角川古語大辞典 第二巻』 角川書店 昭和五九年三月一〇日 五六三頁

参考文献目録

〔テキスト〕

中村幸彦 校注『上田秋成集 日本古典文学大系 56』 岩波書店 昭和三四年七月六日

〔参考文献〕

重友毅『上田秋成集』 朝日新聞社 昭和三二年二月一日

澤瀉久孝『萬葉集注釋卷第一』 中央公論社 昭和三二年一月一日

澤瀉久孝『萬葉集注釋卷第三』 中央公論社 昭和三三年一〇月一日

高木市之助 五味智英 大野普 校注

『萬葉集 二 日本古典文学大系 5』 岩波書店 昭和三四年九月五日

澤瀉久孝『萬葉集注釋卷第七』 中央公論社 昭和三五年九月一日

澤瀉久孝『萬葉集注釋卷第十二』 中央公論社 昭和三八年七月五日

澤瀉久孝『萬葉集注釋卷第十三』 中央公論社 昭和三九年三月二五日

高田衛『秋成年譜考説』 明善堂書店 昭和三九年一月三日

澤瀉久孝『萬葉集注釋卷第十六』 中央公論社 昭和四一年六月三日

和田萬吉『評釋江戸文學叢書 第九卷』 講談社 昭和四五年九月二五日

日本文学研究資料刊行会 編

『日本文学研究資料叢書 秋成』 有精堂出版 一九七二年三月一日

新宮市史編さん委員会 編

『新宮市史』 新宮市役所 昭和四七年一〇月三〇日

岩崎武夫『さんせう太夫考―中世の説経語り』 平凡社 昭和四八年五月二八日

礪波郡役所 編『礪波郡誌』 名著出版 昭和四八年六月一日

大輪靖宏『上田秋成文学の研究 笠間叢書 59』 笠間書院 昭和五一年一月三〇日

五来重 編『吉野・熊野信仰の研究』 名著出版 昭和五一年一月一日

室木弥太郎『説経集 新潮日本古典集成（第八回）』 新潮社 昭和五二年一月一日

高田衛『秋成 シンポジウム日本文学 10』 学生社 昭和五二年一月二五日

澤瀉久孝『萬葉集注釋索引篇』 中央公論社 昭和五二年六月二五日

勝倉壽一『雨月物語構想論』 教育出版センター 昭和五二年九月一日

桜井市史編纂委員会 編

『桜井市史 上巻』 桜井市役所 昭和五四年一月三日

浅野三平『雨月物語 癩癬談 新潮日本古典集成(第二二回)』 新潮社

昭和五四年一月一〇日

新宮市史料編編さん委員会 編

『新宮市史 史料編上巻』 新宮市 昭和五八年三月一日

伊藤博『万葉集全注 巻第一』 有斐閣 昭和五八年九月八日

浅野三平『上田秋成の研究』 桜楓社 昭和六〇年二月二五日

阿部真司『蛇神伝承論序説』 新泉社 一九八六年九月三〇日

植田一夫『雨月物語の研究』 桜楓社 昭和六三年三月一〇日

西郷信綱『古事記注釈 第三巻』 平凡社 一九八八年八月二五日

宮坂敏和『吉野―その歴史と伝承―』 名著出版 一九九〇年一月五日

野本寛一『熊野山海民俗考』 人文書院 一九九〇年一月三〇日

阿部秋生 秋山虔 今井源衛 鈴木日出男 校注

『源氏物語① 新編日本古典文学全集 20』 小学館 一九九四年三月一日

小島憲之 直木孝次郎 西宮一民 蔵中進 毛利正守 校注

『日本書紀① 新編日本古典文学全集 2』 小学館 一九九四年四月二〇日

河合隼雄『河合隼雄著作集 第五巻』 岩波書店 一九九四年三月一〇日

菊地靖彦 木村正中 伊牟経久 校注

『土佐日記 蜻蛉日記 新編日本古典文学全集 13』 小学館 一九九五年一〇月一〇日

中村幸彦 高田衛 中村博保 校注

『英草紙 西山物語 雨月物語 春雨物語 新編日本古典文学全集 78』 小学館

一九九五年一月一〇日

小島憲之 直木孝次郎 西宮一民 蔵中進 毛利正守 校注

『日本書紀② 新編日本古典文学全集 3』 小学館 一九九六年一〇月一〇日

山口佳紀 神野志隆光 校注

『古事記 新編日本古典文学全集 1』 小学館 一九九七年六月二〇日

松尾聰 永井和子 校注

『枕草子 新編日本古典文学全集 18』 小学館 一九九七年一月二〇日

西郷信綱『古代人と夢 平凡社選書 13』 平凡社 一九九九年二月二〇日

今泉忠義『雨月物語精解 秋成研究資料集成 第9巻』 クレス出版

二〇〇三年一月二五日

森田喜郎『上田秋成文芸の研究』 和泉書院 二〇〇三年八月二五日

〔雑誌論文〕

佐々木裕子「文学に見る「蛇」一考察―雨月物語「蛇性の姪」を中心にして―」

日本文学ノート 第一一号 宮城学院女子大学日本文学会 一九七六年二月二〇日

金田文雄「蛇性の姪」の主題と構想―人間像の形象をめぐる―」

広島女学院大学論集 第三二集 広島女学院大学 昭和五六年十二月二〇日

中村正市「蛇性の姪」に於ける人間関係の研究(上)」

尚絅大学研究紀要 第七号 尚絅学園尚絅大学 昭和五九年三月一五日

中村正市「蛇性の姪」に於ける人間関係の研究(中)」

尚絅大学研究紀要 第八号 尚絅学園尚絅大学 昭和六〇年二月二五日

中村正市「蛇性の姪」に於ける人間関係の研究(下)」

尚絅大学研究紀要 第九号 尚絅学園尚絅大学 昭和六一年二月二五日

松本才和「雨月物語の女性―真女兒・宮木・磯良―」

香椎潟 第三六号 福岡女子大学国文学会 平成二年一〇月二五日

中村正市「蛇性の姪」における真女子の執念」

尚絅大学研究紀要 第一四号 尚絅学園尚絅大学 平成三年二月二五日

中村正市「雨月物語「蛇性の姪」論(上)―豊雄の人間の成長の要因について―」

尚絅大学研究紀要 第一九号 尚絅学園尚絅大学 平成八年二月二五日

西郷信綱「三輪山神話の構造―蛇身の意味を問う―」

思想 八七三号 岩波書店 一九九七年三月五日

児玉里麻「女はなぜ蛇になるのか―道成寺説話を出発点として―」

二松学舎大学人文論叢 第五八輯 二松学舎大学人文学会 一九九七年三月二五日

菊地仁「道成寺縁起―川を渡る蛇女房」

国文学―解釈と教材の研究― 第四三巻五号 學燈社 平成一〇年四月一〇日

秦恒平「蛇―水の幻影」

日本の美学 第二七号 ペリかん社 一九九八年四月三〇日

田中憲二「雨月物語」論―豊雄の人物設定― 野州國文學 第六三号

國學院大學栃木短期大學國文學會 平成一一年三月一五日

中村正市「雨月物語「蛇性の姪」論(下)―豊雄の人間の成長の要因について―」

尚絅大学研究紀要 第二四号 尚絅学園尚絅大学 平成一三年二月二五日

山岡敬和「蛇考―蛇への変身―」

國學院雜誌 第一〇六卷六号 國學院大學 平成一七年六月一五日

安原眞琴「熊野をめぐる近世文学―「蛇性の姪」と熊野」

「国文学解釈と鑑賞 別冊」 至文堂 平成一九年一月一日

〔辞書・事典〕

有限会社 平凡社地方資料センター 編

『京都府の地名 日本歴史地名大系第二七巻』 平凡社 一九七九年九月二〇日

有限会社 平凡社地方資料センター 編

『奈良県の地名 日本歴史地名大系第三〇巻』 平凡社 一九八一年六月二三日

「角川日本地名大辞典」編纂委員会 竹内理三 編

『京都府 上巻 角川日本地名大辞典 26』 角川書店 昭和五七年七月八日

有限会社 平凡社地方資料センター 編

『和歌山県の地名 日本歴史地名大系第三一卷』 平凡社 一九八三年二月一八日

石上堅『日本民俗語大辞典』 桜楓社 昭和五八年四月一五日

日本古典文学大辞典編集委員会 編

『日本古典文学大辞典 第一巻』 岩波書店 一九八三年一〇月二〇日

国史大辞典編集委員会 編『国史大辞典 第四巻』 吉川弘文館 昭和五九年二月一日

中村幸彦 岡見正雄 阪倉春樹 編

『角川古語大辞典 第二巻』 角川書店 昭和五九年三月一〇日

山下主一郎『イメージシンボル事典』 大修館書店 一九八四年三月一日

『和歌山県 角川日本地名大辞典 30』 角川書店 昭和六〇年七月八日

尾畑喜一郎『古事記事典』 桜楓社 昭和六三年九月三〇日

安藤精一 編

『図説 和歌山県の歴史 図説日本の歴史 30』 河出書房新社 一九八八年一〇月五日

「角川日本地名大辞典」編纂委員会 竹内理三 編

『奈良県 角川日本地名大辞典 29』 角川書店 一九九〇年三月八日

上代語辞典編修委員会 編

- 『時代別国語大辞典 上代編』 三省堂 一九九四年一〇月一日
- 大塚信一『補訂版 国書総目録 第六卷』 岩波書店 一九九〇年七月六日
- 角川文化振興財団編『古代地名大辞典 本編』 角川書店 平成十一年三月一〇日
- 福田アジオ 新谷尚紀 湯川洋司 神田より子 中込睦子 渡邊欣雄 編
- 『日本民俗大辞典 上』 吉川弘文館 一九九九年一〇月一日
- 福田アジオ 新谷尚紀 湯川洋司 神田より子 中込睦子 渡邊欣雄 編
- 『日本民俗大辞典 下』 吉川弘文館 二〇〇〇年四月二〇日
- 日本国語大辞典第二版編集委員会 小学館国語辞典編集部 編
- 『日本国語大辞典 第二版 第二巻』 小学館 二〇〇一年二月二〇日
- 日本国語大辞典第二版編集委員会 小学館国語辞典編集部 編
- 『日本国語大辞典 第二版 第五巻』 小学館 二〇〇一年五月二〇日
- 日本国語大辞典第二版編集委員会 小学館国語辞典編集部 編
- 『日本国語大辞典 第二版 第十二巻』 小学館 二〇〇一年十二月二〇日
- 黒川雄一『日本地名地図館』 小学館 二〇〇二年四月一日

〔資料〕

- 市島謙吉『燕石十種』 図書刊行会 明治四一年一月三〇日
- 野上豊一郎『解註・謡曲全集 第四巻』 中央公論社 昭和一〇年一〇月一日
- 井上光貞 大曾根章介 校注
- 『往生伝 法華験記 日本思想大系7』 岩波書店 一九七四年九月二五日
- 高野辰之『日本歌謡集成 巻四』 東京堂出版 昭和五五年六月二五日
- 高野辰之『日本歌謡集成 巻九』 東京堂出版 昭和五五年七月二五日
- 日本古典文学大辞典編集委員会 編
- 『日本古典文学大辞典 第二巻』 岩波書店 一九八四年一月二〇日
- 日本古典文学大辞典編集委員会 編
- 『日本古典文学大辞典 第四巻』 岩波書店 一九八四年七月二〇日
- 日本古典文学大辞典編集委員会 編
- 『日本古典文学大辞典 第六巻』 岩波書店 一九八五年二月二〇日
- 中村博保・雷定平『警世通言』「白娘子永鎮雷峯塔」試訳(一)
- 静岡大学教育学部研究報告 人文・社会科学篇 第三七号

静岡大学教育学部 昭和六二年六月

中村博保・雷定平 『警世通言』「白娘子永鎮雷峯塔」試訳(二)

静岡大学教育学部研究報告 人文・社会科学篇 第三八号

静岡大学教育学部 昭和六三年三月

沙門鎮源 『法華驗記』 図書刊行会 平成五年三月二〇日

近世文芸研究叢書刊行会 編

『日本演劇の研究 第二集』 クレス出版 一九九七年四月二五日

馬渕和夫 国東文麿 稲垣泰一 校注

『今昔物語集① 新編日本古典文学全集 35』 小学館 一九九九年四月二〇日

今浜通隆 『元亨釈書 教育社新書〈原本現代訳〉 62』 教育社